家庭雜誌

第六拾貳號

娯樂　は勞働の資本也勞働の必要なる如くに娯樂も亦必要也

科學婦人　ソマーヰル婦人は其名の語律の指し示す如く英國の女にて英國の生みたる女の中最も卓絶したる科學の婦人なり

小兒の世界　鼠と蚯蚓

恐ろしき一夜　想ひやるだに人なして胸轟かしむ



○肺病よけ○

スコット乳菓

たへまなき咳嗽の爲に肺臟其他呼吸機關を損じる迄打捨て置かずして速に彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを調合して味ひよく製造したる滋養食料の大王なるスコット乳菓を服用せよ忽ち損所を補ひ咳嗽を止む

○貧血の婦人

は滋養分なき血液を保てるものなれば常に此の乳菓を服用せば鮮血を增し壯健なる筋肉を生ずること疑なし

○小兒○

はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり瘦せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して味ひよく製造したる**スコット乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓か滋養分に富む事は他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ひて奇効を見べし

殊に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身體となること疑なし

世界の大醫は此の乳菓を最も精氣を增し滋養分を與ふる不思議の食料品なりと世人に薦め居る所なり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	烏居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大坂道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀兵衛

民友社發行書籍雜誌賣捌所

東京市神田區裏神保町	上田屋
仝　表神保町	東京堂
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　鎗屋町	北隆館
仝　神田表神保町	好明館
仝　京橋區出雲町	警醒社
仝　芝區櫻田本鄕町	文友館
仝　神田佐柄木町	田上書店
仝　神田裏神保町	敬業社
仝　日本橋區新大坂町	鶴屋喜右衛門
横濱市太田町四丁目	國民新聞社支局
大坂市備後町	吉岡書店
仝　本町四丁目	岡島書店
仝　備後町	岡島新聞舗
仝　心齋橋通り	中村峰雄
京都市新町	便利堂
仝　佛光寺通り	東枝律書房
京都中寺町通り	飯田信文堂
仝　河原町	大黑屋
神戸市榮町	船井新聞舗
名古屋市本町	川瀬代助
福岡市博多	積善館支店
仝	森岡書店
熊本市新町	長崎次郎
仝　南坪井町	好文堂
仝　古川町	網千屋
熊本縣八代郡八代町	岩本理平
仝	時昌堂

熊本縣菊地郡隈府町	中島常平
長崎市酒屋町	安中半三郎
仙臺市大町	木文書店
仝　國分町	佐勘書店
盛岡市中橋通	東北堂
仝　呉服町	便益堂
廣島市革屋町	積善館支店
仝	松村書店
越後水原町	西村六平
仝　長岡表四の町	目黑十郎
仝　高田町	高橋書店
仝	室直支店
仝　直江津町	高橋支店
仝　新潟市西堀通り	原貞治
仝　村松町	梅の屋佐吉
仝　新發田町	津野仁太郎
仝　小千谷	野口俊策
北海道札幌南一條西二丁目	玉振堂
長野縣長野町	西澤喜太郎
仝　松本町	水琴堂
仝　岩村田町	文盛堂
仝　小諸町	小山廣文堂
鹿兒島縣鹿兒島市	吉田幸兵衛
仝　仝	金光堂
仝　仝	谷村書店
仝　仝	坂本新聞店
仝　川内	文友堂
茨城縣水海道町	新々堂

塚越芳太郎著

近松著作一斑

上卷本月出版
下卷來月出版

上卷目錄◉第一、近松の著作◎(一)彼が著作の類別○史戯曲○社會戯曲○史戯曲と社會戯曲◎當(二)彼が戯曲の躰○如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎○如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎◎(三)彼が戯曲の躰の進歩◎(四)彼が戯曲の想○戯曲の主意○人物の性情◎(五)彼が戯曲の想の開展◎彼が戯曲の効果○彼が戯曲より學び得べき教訓○彼が戯曲より學び得べき歴史○彼が戯曲より學び得べき文學◉第二、彼の史戯曲◎「雪女五枚羽子板」解剖◎「曾我會稽山」解剖◎「國姓爺合戰」解剖◎「關八州繫馬」解剖

既往の日本は如何に彼の著作を秘藏することを誇るを得るや。彼の著作は其眞成の價値を以て如何に貴重せらるゝに足るや。

此書は則ち詳に此の疑問に答へたる者。

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

新刊發賣

青年叢書 第五卷

技術

定價拾貳錢　郵稅貳錢

近代世界工藝品の競爭は、技術的意匠の巧拙に在り。技術の盛衰は國光宣揚の時代を過ぎて、國富消長の新時代に來れり、技術家の任務亦重ひ哉。

技術は人種教育の一手段也、文質調和を以て人種教育の正鵠とせば、技術は實にして其隻翼ならずや、剛にして和、勇にして溫、宏懷ある餘裕ある國民を造らんと欲せば技術思想の素養重ぜざるべからず。科學は組織的智識を與ふ、技術は人種的德操を敎ゆ。

技術は人類事業の最高至美なるものなり、人よ、技術家たれ、少くとも賞翫者たれ、

『技術』の目次

技術(乾、坤)　技術發達の原理　技術と近世生活
建築　彫刻　雄辯　詩歌　音樂
一大技術

青年叢書 第四卷

職業論

紙數百八十頁　定價拾貳錢　郵稅貳錢

◎毎日新聞　青年叢書の第四卷として出でたる者、職業の眞義より處世論に至る如何にも巧者にて既出三卷より凡ての點に於て勝れたる者あるを認む獨り怪む斯の如き小冊中に古今東西より數多のコーテーションを爲すに極めて煩雜の嫌ありて方今文界の弊事なりと民友子の痛論するに正反對の趣を呈する也

◎讀賣新聞　新日本青年のため青年の執るべき生活と事業とに付精細に其指針を與へたる者民友社一流の筆錄今更に是非するの要なし

◎福音新報　是は青年叢書の第四卷なり職業を精神的に論じたる者にて、パン學以上の趣味を傳ふるに足れり。……人事世道に補益する所少小に非るべし。

◎早稻田文學　青年叢書の第四卷、載するところ「職業の眞義」「宏業と功名心」「職業の撰擇」「時間論」「勤勞と休息」「社會と退隱生涯」「健康論」「處世論」「電氣時代の巨人トマス、エヂソン」等各項皆泰西名家の金言玉句を集め之れに本邦古今の名家の所說などへ加へたるものなれば青年者流の好參考書なり又本卷は從來の如く見出しを本文の上に置かずして悉皆各項の初に揭げたれば躰裁一層整ひたり

◎文學界　青年叢書の第四卷なり民友子が青年を鼓舞誘掖する誠に勤めたりと云ふべしなみ／＼の筆つきならんには職業論など青年の一顧を得ることさすら難き嚼蠟的のものなるべきを覺えず卷を終らしむるが子の獨得なるべし

◎東京朝日　青年叢書第四卷として出づ職業の眞義より說起して時間、健康、處世の論に及び富國强兵の要は職業に存するの義を述べたるものなり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

第二征淸壯烈談

定價十錢
郵稅二錢

材料の正確と文章の平易とは、前編に於て江湖の既に認識する所なり、本編に至つては更に幾多の雄烈、壯快、痛恨、悲愴の談話を集む、序次錯綜、山盡き、水生じ、花落ち、鳥啼く、讀み去り讀み來れば、泣くべく、勇むべく、樂むべく、悼むべし千古未曾有の一大快擧は、如何なる代價によりて買はれたる乎、滿州、山東、澎湖の春色は何人の血によりて染められたる乎、是等の事を知らんと欲せは他に求むる勿れ、たゞ第二征淸壯烈談一篇を讀め、

本書に對する批評

(早稻田文學)民友社發兌、旅順、蓋平、紅瓦塞、海城、威海衛等の役に於ける我將校兵士の忠勇義烈なる逸話七八十種を集めたるもの、文章は平易なる漢文躰、ところ〳〵に挿畫あり高等小學以上の童子に讀ましめば敎育上に益する所あるべく興味もまた十分なるべし紙數百餘頁定價金拾錢

(讀賣)其第一をうけて旅順の役以來威海衛の劇戰に於ける忠勇烈士の好談柄を收拾す壯烈痛快

(東京朝日)戰地の逸事異聞を見聞に隨ふて記述したるもの曩に同著の第一編出づ是乃ち其第二編となす記事簡明觀るべきもの多し

●第一征淸壯烈談 定價十三錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵券代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年九月二十五日發行

家庭雜誌第六拾貳號

目錄



社説

娛樂

蒸氣機關も火の力を加ふることなくては運轉するものにあらず。人も娛樂することなしには働けるものにあらざる也。

娛樂は罪にあらず、必ずしも惡しき事にあらず。勞働の資本也。勞働の必要なる如くに必要なるもの也。若し人の此世に生れ出でたる目的の一を幸福にありとせば、人の身心を安慰する娛樂はたしかに其目的の一部なりと申すも不可なかるべし。それのみならず適當なる娛樂は人に新たなる活力を添ふること猶火の力の蒸氣力を增すがごとく、新元氣となりて人の働きを勵ますものたり。

唯注意すべきは、娛樂の總てが悉く此くの如くに人生目的の一部にも合ひ、又新なる元氣となりて勞働を勵ますものにあらざること是也。娛樂の種類によりては、或は却て身躰の健康を害せんとするもあり、或は却て雄心を消磨し遊逸の怠性を作らんとするものあるをも記憶せざるべからず。故に人は勞働の種類を撰擇するに大に注意せざるべからざる如く、娛樂の種類を撰擇するにも亦大に注意せざるべからざる也。況してや娛樂は人を溺らし易き性あるものにして、大なる克己力あるにあらざれば自ら抑制し難き場合あるをや。

娛樂の撰擇に際して、第一に注意せざるべからざるは娛樂の健全なるべきこと也。成るべく戶外的なるを要し、成るべく天然を相手にするを要し、成るべく活動的性質あるものを要す。

旅行は健全なる娛樂の第一指に屈せらるべきものた

り。獨り國内を旅行するのみならず、遠く海外に去るを可とし、獨り一身を以て去るのみならず、成るべく家衆を伴ひて去るを妙とす。旅行組合を作りて是迄多くの講中がなしたる如く娯樂費の若干を積金して交る交るに旅行する如き、遊船倶樂部を設け、美はしくして各種の娯樂と便利とを具へたる大滊船を作り、而して最も廉價に世界の名所大都形勝の地等を巡遊するを得せしむる如き、亦面白からずや。

其他遊獵乘馬遠足散歩游泳擊劍の類、皆身躰にとりても精神にとりても頗る健全なる娯樂を收むべきものとす。

娯樂の撰擇に際して次に注意すべきは、成るべく衆と共に樂むべきことと也。獨り樂むと衆と共に樂むと孰れか樂しきとは、孟子の設問以來何人も其衆と共に樂むの最も樂しきことを疑ふものあらず。春の朝、秋の夕、京坂を觀る者は、到る處に花の下、芝生の上、若草を延べ、紅葉を敷きて、父妻弟兄下女に至る迄團欒しつゝ、行厨を開き、瓢箪を傾け、以て一宵一日の歡を盡くすものあるを見るべし。彼等が最も廉價に其最も樂しき一日一宵の歡を買ふは寧ろ美風と稱すべからずや。

娯樂の撰擇に際して更に注意すべきは、成るべく其高尚なるものを擇ぶべきことと也。旦夕工業に從ひ、商業を事とし、或は政治征戰に盡瘁する等の人にして、光風霽月を樂み、詩思を騁せ、文思を弄する如き、唯に其人品を高尚にするのみならず、其樂みも自ら津々として餘味あるを覺ふべし。若し然らずして一たび賤むべき酒色の樂に陷墮することあらん乎、心身の活力を害し、將に希望をも事業をも殺すに至らんとす。愼まずんばあるべからざる也。

要するに數千萬斤の重きを持して一瞬千里の遠きを致すべき蒸氣の力は、亦此等の數千萬斤の重きを破碎すべく、或は曳て深淵にも沒し去るべき力たり。撰擇處

置其宜しきを得るにあらずんば、其大に益する所以は正に以て大に損するに足る也。是れ娯樂の撰擇をなすもの丶須らく意を用ゆべき所にあらずや。

史談

科學の婦人

讃美生

ソマー井ル婦人は、其の名の語律の指し示す如く、英國の女にて、英國の生みたる女の中、最も卓絶したる科學の婦人なりけるなり。

父は海軍の軍人にて、千七百八十年の十二月、外國に勤在の爲め、數年の間、夫人と別れて、往きぬ。夫人は良夫を送りてロンドンまで往きしが、時しも、メリーの胎内にあつて產の時近かりしかば、スコツトランドの鄉里まで歸り難くて、餘儀なくセツデポーなる良夫の兄弟、ドクトルソマー井ルの家に逗留したり。此くしてメリーは、後に其舅姑となりたる伯父伯母の家に生れぬ。彼の生涯は異様なる記憶の上より出立しぬ。何となれは、その未來の家に生れて、其姑に養育せられけりとは、隨奇なる話なれは。

メリーは父方よりするも、母方よりするも、高き生れなりけり。仕へて水師提督に陞れる其父井リヤム、フェヤファックスは、米國の父として世に隱れもなきゼヲヂワシントンの從兄弟にて、母はスコツトランドにてチヤーター家と稱する名門の女なりき。彼は双方の血筋より、高貴なる氣象を稟けたり。彼の母は中々の女丈夫にて、如何に急遽なる場合に在つても精神の現在を失はざりき。一夜附近より火起り、風につきたる火花隣の家を越へて、雨の如く其家根に落ちかゝるに、夫人は獨り僮僕を指揮して、悉く家具什器を荷造せしめ畢り、さて後に僮僕を召び集へ、いざ落つきて食事

すべし、火、隣家に及ぶまでは、急ひで荷物を運ぶに及ばずと。火はやがて鎮まりぬ。狼狽して器物を投げ出し、出すに隨つて之を失ひけるもの、比隣皆然らざるはなきが中に、故紙一枚も失はざりしは夫人の膽勇に依れるなりけり。生涯の中此かる類少なからず。メリーの健全なる精神は全たく母の賜なりけり。

父の長き不在の間、母は彼をつれて、エデンボローと相對ふハーンチスランドと云ふ、寂しき海邊の村に來り、こゝに閑靜なる生活を樂しみぬ。メリーは母より文字の敎育を受くるに過ぎざりしかども、この小なる科學の婦人は、恐らく恒に海岸に出で、貝殼、化石、稚草の類を聚め、海鳥の形狀、擧動、言語に注意し、若くは臥房の窓よりして、空に動く星に眼を留めたりしならん。彼が此時の敎育は、敎育せざる敎育、即ち精神の萌芽を健全ならしむるとにぞありける。然れども千七百八十九年、彼の九歳の時、外國より歸り來りし父は、その識らざりし子の野蠻なるに驚きぬ。母は早速メリーを某の寄宿學校に送りぬ。當時の學校は今と異なり、種々驚くべき折檻道具を以て小兒を折檻するが科業なりしかば、メリーもその折檻道具に欲めらるゝと一年ばかりにして家に歸り、其の無學を以て母を驚かしめ。嘗に父を驚かしつる如く。當世婦人の敎育といへば、體よく文字を記し、差引の勘定を能くすれば頂上なりしかば、メリーをして、微かなりとも成就する所あらしめば、母を滿足せしめたらんも、餘りの無學に母も呆れ、少なからざる月謝と時とを徒費したりとて、大に少女を叱責したりしかば、メリーは大に之に懲り、師に依らずして、自ら敎ふるとを始めぬ。ア、是れ學問の人の大くなる唯一の方法にて、彼が僅かに十歳の妙齡より始めて九十二歳の高齡に於て終れる修學の法なりけるなり。彼は此方法に由つて、禽獸、虫魚、海陸の草木の智識に就て造詣せしのみなら

ず。沙翁の戯曲を看出し來つて眼を偸みて研究するほどに、幾ばくもなく卒業したり。冬の間、母は居をエデンボロー府に卜せしかば、彼は玆處にて音樂を學び、次第にラテン語に熟達しぬ。彼が異材此の如く駭くべきも、父母は勿論何人も彼を識認するものなかりき。彼が始めて伯父のドクトルを驚かせしは、その十四のの時なりき。此の齢に於て、彼は母に携へられて、己の生れたるヒットボーの伯父の家に往き、伯父夫婦に見えぬ。伯父は彼を見て彼に是まで爲したる所を問ひ、彼の答ふる所を聞き、驚嘆してその生長せん後を想ひやりぬ。渠は辭を極めてメリーを奬め、彼が今ラテン語を學べりと云ふを聞き、古典家として著名なる當代の婦人に就て語り、彼の逗留の間、毎朝二時間、少女の爲にボルジル（羅馬の詩人）を讀みぬ。メリーは伯父の奬勵によりて自から鼓舞し、幾もなくしてラテン語を卒業してグリースス語に溯り、一二年を經てセノフホン、ヘロドタスを讀み得るまでになり。振古以來最大文學を品評して差支なきまで文字の研究を造詣したり。

メリーの天才に就て最も駭くべき點は八面玲瓏なるにありき。科學の人の科學病人なるべく信ぜらるゝは普通の事なり。然れども彼は謂ゆる、その臼に來るものは悉く粉するの女なりけり。彼は嘗てその喜ばざる技藝、學問を看出さゞりき。彼のエデンボローにあるや、畫家ナシミス氏に就て畫を學び、渠をして門下の最秀と識認せしめぬ。斯くて彼は終まで畫を廢せざりき。彼は音樂に於て、植物學に於て、優に一家を成したり。彼が一代の事業は、天文學及び數學にして、其傑作は『天文學の機械』なるは人の知る所なり。然れども彼はこの如く。倘ほ地理學、顯微鏡學の著述あるなり。世人は往々婦人學問に荒む時は家庭荒ると謂へり。斯くしてシドニースミスは言へり。女智慧の柑果を啖へば餘のも

のは空腹を忍ばざるべからずと。然れども有名なるホーセツト夫人は之に反して曰く、ソマーヰル夫人は即ち此の事を證言の痴なるを證する活ける證據なり。彼は無類の家妻然して巧なる針女なり、然して又巧なる料理人、然して從順なる妻、慈愛なる母、人の爲に謀りて忠實なる友なりきと。彼の愛は動物に及び、中にも格別鳥を愛す。彼は斯の如き科學の熱心家にして、然も解剖の殘忍なるを禁ずる能はず。深くこの慘事に對して戰ふ志士仁人に對して謝意を表したり。或る著作の數十頁を、其馴れて肩に栖れる山燕と共に書きたりとなり。

此の如き偉女子の配として其光榮と名譽を分つべき夫は如何なる人なりや。如何なる人ならざるべからざるや。メリーは如何なる人を愛し得たりしや。是れ何人も知らんと欲する所なり。

メリーの最初の良夫は、サミユエル、グレーグ君なりき。不幸にして渠は婦人の學者を蛇蝎視し、婦人の學問するとを他の情夫を持つとの如く嫌ひ惡むで、渠自身は何の學問もなき人なりき。メリーが如何なる境遇よりして此の如き科學と婦人の敵に身を委するに至りしやは、今得て考ふべからずと雖、その良夫の結婚後三年にして亡くなりしは、彼の身に取り、不幸と云ひ得ざるほどの幸運なりけり。彼はグレーグ君の妻として二人の男兒を生みたる外には何事も爲し得ざりしなり。良夫死して彼はその二子を携へてスコツトランドなる生父の家に歸り來れり。彼の數學の業大に進み、遂に大成して、某の數學協會より銀章を贏ち得たるは此際にてありけるなり。科學の進況斯の如く著きものあるにも關らず、彼の父母、親屬朋友は、概して彼の爲す所に輕し、彼は書籍と石盤を棄てゝ好き男を生け捕らんとを勸告せり。獨り、伯父のドクトルの家にのみ、同情を看出し、此家に於て善き男を生け捕りた

り。それはドクトルの子、井リヤムにて彼とは從兄妹同士の中なりけり。井リヤムは身陸軍の醫官にて、科學と合性なりしかば、往のグレイグ君とは異なりて、大にメリーに接近したる良夫なりき。然れどもメリーと渠の間には猶ほ若干の距離あり。自らその妻に企て及はざるとを料り知りたりしかば、渠自身その妻に献身し、妻を頌め妻を奬め、妻を喜び、妻を誇り、凡て妻の爲る所を贊け、凡て妻の爲る所に便宜を與へ、妻の欲する書籍を尋ねあるき、妻の爲に艸稿を淨寫し、妻の書架を片つけ、妻の書齋を綺麗に掃除しつゝ、妻の爲さんと欲する所を聽き、妻の用を爲すとを以て無上の樂となせり。彼は實に好き男を得たるなり。井リヤムは今の婦人社會に謂ゆる親切なる良人なりけるなり。メリー自から其良夫を頌して、曰く。我が成効するとあるは毎に、深く我が心を動かすものは我が良夫の親切なりき。此くも親切に我が事業を喜ぶ人は、千人に一人ありとも覺えじ、渠は寛大の性にて嫉妬なとは思ひも寄らず、渠は終まで、凡て我爲す事業に快樂を取りき』。と其女の一個も亦人に語りて曰へり。わが父の爲玉ふ事一個もわが母を煩はすものなかりき、愛の重荷を除きては』と渠は實に彼の良夫に造られたりけらし。

今や、彼が一代の事業を成す時到れり。千八百二十七年、ブローカム侯は應用科學擴布會の爲に書をソマー井ル夫人に寄せて、彼にニユートンの原理及びラ、プレイの天文學註解を徵めて曰く、後のものゝ如き、英國人にして、之を識るもの僅かに百人ほどもなく、之を讀みしものは二十人も無からん。然れども余は確く信ず。御身の力能く之を解くに餘りあり』と。彼は此の意外なる要求に驚倒せられぬ。彼は其の能力の此かる大業に任ふべしと自ら信ずる能はざりき。彼はその自から教へたる智識を、かの大學出身の博士、學士の博識を望

むべきものにあらざるとを信じたりしかば、博士學者すら敢てせざる此の大題に向つて指を置くとは、潛越の極なりとして、初の間は辭退したりしかど、ブロートム侯と其夫の勸告の切なるより、若し其の稿本の要求者の屬望を滿すにあらずんば、その稿本を火にすべしとの約束を以て、之を試みんと心を定めぬ。當時ソマーヰル一家は運命の背く所となり、貧の爲にも書かざるを得ざりき。然れども、一家族の母として、一家庭の首として、一身内外の家政に當る身にしあれば、筆を執り得る時間とては、最と僅々たるが上に、交際上の幾多の障害は、殆ど彼を苦しめぬ。家は當時エヂンボローを離ると遠からざるセルシーなりしかば、己彼を聘び出す交際社會を辭するは無禮に當るのみならず、のんきながら好意を以て態々彼と一二時間を費すべく訪ひ來る友を戶より追ひ返すは、愈無禮なりしかば、彼は憤悶、呻吟の裡に筆を進めぬ。されどそれにも拘らず憤悶呻吟の中に筆は進み、朞年を費さずして書成りぬ。

書成るや、彼は擇んで『天文學の機械』なる名を冠し、之をブルヲグム侯爵に贈りぬ。『天文學の機械』世に出つるや、學問界の不思議として觀られ、其の著者を擧げて無名の茅屋より、當時の思辨者、學者の中の第一流に置きぬ。ソマーヸル夫人は今や引ばり凧となり、星學協會は彼を名譽會員に推撰し、學士會院は、彼の半身像を館内に安置し、ダブリン府の學士會院以下、あらゆる學士會皆彼を請ふて名譽會員に推撰して以て會の名譽となし、ピールの政府は彼に二百磅の年金を以て其尊敬を表したり。是にソマーヸル一家を貧の束縛より救はれぬ。後數年、チヨンラツセルの政府亦之を三百磅に益したり。

彼の生涯を通して、彼は婦人の幸福を主張するもの、堅硬なる辯護士なりけり。彼が其の同姓の爲に戰ふべ

き力、彼の内にあることを感じたるは、猶ほその妙齡の日なりしなり。彼が既に十六の時人に告げて曰ひき。我は己の事業に因つて金錢を得んとの望なきも、必ず、、ある事に卓絶せんとの志一日も胸より去ることなし。何となれば婦人と云ふもの、今日彼等の事業として許されたる下等の仕事より、數倍高等なる事業を能くすべく造られたるものなることを、固く心の中に感ずればなり』と。ヂョン、スチユアート、ミル氏氏が婦人に、參政權を與ふるの請願を議院に提出するや、議案に署せられし第一の名は彼の名なりき。彼は又ロンドン大學の評議員と共に、婦人に學位を與ふる請願に盡力したり。是は當時に成効せざりしかど、彼が世を沒ふる數年にして公許せられぬ。彼はガートン大學は、婦人に高等敎育を與ふるの美擧を賛して、盡く、その數學、科學の文庫を寄附したり。婦人敎育の母として彼の肖像は永く同大學の珍藏する所となれり。

『天文學の機械』以外、彼は猶ほ、『博物學と地理學の關係』『分子と顯微鏡學』の著あり。後のものを彼は八十歲の高齡に於て卒業しき。彼は研究と著述の爲め、氣力を費すこと過度なりしも、少しも其の健康を傷ることなく、老ゆるに從つて益々壯に、千八百七十二年、九十二歲にして身を終るまで、手に冊子を離さゞること平生の如くなりけるなり。『我今齡に邁めりと雖、尋常の人事を喜ぶこと少しも少年の時に異ならず。我は大洋の潮流を定むべき遠征の結果、地球より太陽に至るまでの距離、ドクトル、リビングストンの名を石磨ならしむべき氏の發見を知ることを能はざらんことを悲しむ。然して是等のものに勝りて悲しむべきは、かの人間を辱むる所の奴隸制の全廢を見る能はざるにあり』。此言是れ彼が剛健なる老境を寫すの鏡なりけるなり。

科學

小兒の世界

嵯峨のや主人

蠶

綾と歟、錦と歟、金襴と歟、其他いろ〳〵の美しい絹布の類は、まあ何處から如何して作られるので有ませう、若し其源を委しく御話したら、諸君は屹度御驚きでせう、絹布は地、と空氣、と水とから作られるのです。なに？地と、空氣と、水とから？其様馬鹿な事があるもの歟、とお笑ひでせうが、是は誠です、二粒の種さへあれば、後は地と水と空氣から作られるのです。

桑の果の一粒、其を地に蒔けば、其粒は勉強して食物を吸ます彼の食物を何かと言へば、地、と水、と空氣です。粒は此食物を得て、地下で何を致します歟、彼は地下に於ては堅き強き根を張り、地上に於ては幹を放ち、幹より枝を放ち、枝より芽を放ち、芽より葉を放ちます。葉の間に花を生じ、花より果を結びます。

然し是では絹は出來ぬでは有ません歟。絹は如何して出來ますか？

絹を作るにはまだもう一ッ種が要ます、其は第一の種よりはまだ小さい、殆んど針の頭位の蠶卵で有ります。此蠶卵は外部は堅い被覆で包まれ、內部は流動躰です。惠深い造化は注意を此様な卵に向けてくれたのです。此蠶卵を太陽が容捨なく温める中、內部の流動躰が固まッて、一箇の虫に孵化ります。此虫の如何程小さい歟といふ事は、砂粒の様な小さな卵の中に居るのを以て知られます。然し身の小さいにも係はらず、可成り鋭い腮を持て居ますから、其で外部の被覆を食破ります。種々と骨を折た後、終に食ひ破ぶッて此世

の風に當るや否や、嬉し喜んで天鵞絨の樣な柔かな、桑の新芽の上に轉げ出て、清らかな空氣を腹一杯吸ひます。扨此世に出るや否や、既に一骨折て來た躰ですから、腹が空つて居ます、で何か食はなければなりません、其には既に頭の頂邊に膨れた樣な目があるし、體には十六本の足があるから、目で食物を見付、足ではッてゆくには差支ありません、彼は直に桑の新芽には附ます、此新芽、是が蠶の爲めには、朝飯、と晝飯、と夕飯で、彼は晝夜の別もなく、唯此葉を食て計居ます。食て食て躰は大に肥太り、終には殆んどはちきれる計になります。さうすると蠶も少し考へます、苦しいから食ふのを止めて、身も動さず、眞青になッて太い息を吐て居ます。其中に眞成に皮は破れます、すると蠶は幾度躰身を轉げて、其古い衣服を脱棄ます、然し皮なしでは如何するでせう？否、古い皮の下に、何時歟もう新しい、美しい、稍白やかな皮が出來て居るので、之は前のよりは廣い大きい皮ですから、彼の躰に適當なのです。彼は衣服を脱替るや否や、又少しも息みなしに桑の葉を食ひ始めます、食て食て躰が太り、大きくなッて皮が狹くなると、又其皮を脱替ます脱替ゆる事、二度、三度、四度に及ぶが、其度に彼の皮は美しく、白やかに、廣く、大きくなるのです。斯して三十日を經る間に、砂粒の樣な虫は小指程の大きさに生長します。此小指程の蠶は、既に桑の葉から充分の材料を集め得たに依ッて、そろ〳〵仕事に取掛ります。

彼は管口から下唇に糸を吐き、其を彼の臥床に敷てある木の枝に懸るが、此時彼は特殊の運動を始めます。彼は絕ず糸を吐ながら、彼方へ廻り、此方へ廻ッて、其を自分の周圍へ捲付ます。とんと我々が糸捲へ糸を捲く如く、唯異なる所は、我々のは內から外へ捲のだが、彼のは外から內へ捲のです。捲くことと三日が其間一度

も絲を切らぬが、終に鷄の卵の小さい程の大さの袋を、自分の周圍に拵へます。其色は黄もあれば白もあるが、何れも光澤が有て奇麗です。此袋、之を繭といひます。繭の糸の長いこと、若小兒が其端を採て走るなら、其糸のつくるまでには恐らく十五六分ばかゝりませう。繭の中に在ては、蠶はもう疲果て、力なさゝうに臥て居ます。彼は三十日の間、休むことなく桑の葉を食ひ、四度衣服を脱替へ、三日の間絶ず糸を吐て糸を捲ました、今はもう安息の時です。で彼は最後に仕事衣を脱ます、彼にはもう足も要ません、繭の內に居ては、十六本の足も何にしませう？彼にはもう目も要ません、繭の中に居ては、何を見る必要が有ませうぞ？彼にはもう腮も要ません、今まではさんざ桑の葉を食たけれども、で彼は總て之等のものを皮と共に打棄て、一箇の螟蛉に變じて仕舞ひ升す。

此螟蛉繭の內に在て死だ如く横はッて居るが、然し此死だ樣な螟蛉の皮の下には、もう進化の理が行はれて居るのです。十日を經て薄黒い、堅い螟蛉の皮は裂けて、其下より一箇の蝶が飛出します。頭には二ッの大きな目が有て、胸には上の方から四ッの白い翼、と下の方から六本の足が生て居ます。然し如何して蝶は、始自ら好んで籠城した牢の內から、今出て來るで有ませう歟？彼の足は弱くして、迚も千筋萬筋の糸を切る事は出來ますまい、と言て前の鋭い腮のない身は、今のやさしい彼の管口は、花唇の露を吸ふにさへ堪へぬ程のもの、何で繭を破り得ませう、然らば彼は空しく此牢の內に在ッて死ぬるので有ませう歟？否、造化は彼に更に別の方法を授て有ます。蝶は口より一滴の汁を吐き、其を以て繭に穴を開け、此穴よりして再び浮世に飛出します。

然し人は總ての螟蛉に繭を破る事は許しません、何故なら穴の開けられた繭は、糸が切々になッて仕舞ふか

らです、故に人は僅の螟蛉にのみ穴を開て飛出すのを許します、其は飛出した蝶に蠶卵を産せて、翌年又糸を取る爲めで其他の繭は盡く鍋に入れて之を煮、而して中の螟蛉を煮殺し糸を捲ほぐして、更に之を太い糸に績ぎ、之を種々の色に染て、又種々の絹に織るのです。



第一圖

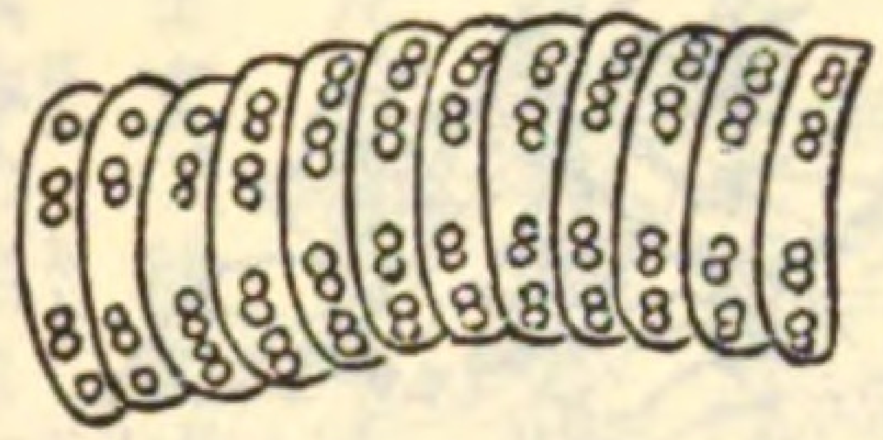
此如く絹は蠶の吐く汁より生じ、蠶の汁は桑の露より生じ、桑の露は地と水と空氣とより生ずるもの故、絹は二ッの小さな種粒の助で、地、と水、と空氣とから作られると申すのです。

蠶の蝶は之を唯の蝶に比べるに、餘り美しくは有ません、然し幾多の人が蠶糸を得んが爲めに、氣を使ひ、心を勞し、手足を疲らして、恰も下臣が君王に使ふる如く、蠶の爲めに、或は蠶房を作てやり、或は室を温めてやり、或は好める食物をやるなど、種々と骨を折るが、彼も誠に仕合せもので有ます。

蚯蚓

若泥土の中にもぐ〳〵とうごめいて居る蚯蚓を以て、荒野の大空を飛揚する鷲に比べたなら、其差は實に大したものでは有ません歟、然し蚯蚓だとて鷲と同じく感じたり、動いたり、食たり、卵を産だりするのを見れば、矢張彼だとて動物で、唯鷲に比べては稍下等だといふ斗です。蚯蚓も洒落た動物で、眼もなければ、鼻もなく、耳もなければ、口も判然としたのはない。頭なぞも偏なもので、形はよく分らない、其に足も眞成のものは有ません、ですから長やかな、軟かな、赤色の彼の體は、百以上の環から成立て居て然も其環は各動くに係はらず、彼を關節足の動物には組入れません。第一の環が上唇を形造り、第二の稍小さいのが下唇を形造て居ます、蚯蚓には眞成の足はない

が、然し躰の下部の方に一面螺線狀の尖が列を爲して居て、其助で彼は帶の如くうねり動くのです。呼吸の氣管は蚯蚓にはないが、空氣は彼の躰の薄皮を透して、血液と一所に流動して居ます。彼は皮から液を吐ますが、其で彼の躰は濕ばいのです、蚯蚓には骨はないが、然し胃は有ます、彼の胃は黒色の管の如く、口から尾まで全身に渡る長いもので、其色の黒いのは、中にある食物に依るといふ事です。



第二圖

蚯蚓は皆樣御存の如く常に濕ッぽい地に斗居ります、而して彼が地の上へはひ出るのは温かな水氣の有りさうな天氣の時斗で、其も何時も夜に限て居ます。ですから其樣な天氣の時、朝早く、まだ太陽の出ない中庭へ出て御覧なさい、澤山蚯蚓が居ますから、尤もさし足ぬき足で竊往かなければ不可ません、若しどし／＼歩て往くと皆隱れて仕舞ひますから、何故でせう、目も、耳もない癖に、如何して彼には人の來るのが知れませう？其は彼は觸感が大變敏捷だからです。

家鴨、鷄、鵲、鴉、土鼠等は蚯蚓の大敵で、彼等は蚯蚓を見附る、と直平げて仕舞ひます、又庭作も彼を退治るし、漁夫も彼を捕へます、釣針へさして魚を捕うと思つて。其外激しい旱、強い寒さも蚯蚓の敵で、彼は之を避ける爲めに地の下深く潜み、冬なぞは一間も下の方へかくれて居ます。蚯蚓は水、と太陽、と寒さを恐れますが、殊に鹽水と來たら大敵です、ですから庭作は鹽水を流して、屡彼を地下から追出します。

彼の食物は、植物の腐敗たのと土とです。彼は之を貯へて置て、夜になると地上に現はれ、之を地下から地上へ投擧ます、斯して下層の地を上層に、上層の地を下層に、自から地を耕して居ます、勿論其は甚だ遲く有て、我々は殆んど氣が着ない位では有るが、然し自

然の目からは之が大した意味の有る事です。蚯蚓も卵を産みますが、其が孵化ると直ぐ蚯蚓になるのです。唯其形甚だ小さく、躰の環も、其數は甚だ少いさうで、而して生長するに從て環は殖ると申します。倘著るしい蚯蚓の特質は、彼を寸斷々々に切ても、倘長い間生て居る事です。

文藝

恐ろしき一夜(下)

蘆花生

强盜の騷と思ひしに、此はまた凄じき火事なり、然れど此火事よも尋常の火事にはあらじ、兎に角用心せよと、母上は燈心かき立て、家內の者殘らず呼び起して戶をよくさゝせ、偖樣子を見むと獨り門外に立出で玉ひしが、やゝありて、『戰爭！戰爭！』と云ひつゝ歸り來玉ひぬ。城の方より銃丸二ッ三ッ、流星の如く闇を貫ひて母上の頭上を飛びしとなり。家は皆起き出でたり。萬一の事もあらば立退く可しと、母上は病める姉君、幼き吾等の事、夫れ〳〵手配を定め、婢は飯を焚きて握飯造り、僕は甲斐々々しく草履などの用意し、おの〳〵帶引しめて廣き臺所の行燈を圍みて集りたり。夜は二時近からむ、寒さ彌身にしみぬ。室廣ければ隅は小闇き臺所の天井に、行燈の光チラ〳〵圓き月の影を搖かす。家の內森々として、言へば天井も壁も障子も吾聲を響き返へし、吾と吾聲に驚きぬ。耳傾くれば、外の方は遙に火事場の騷を聞く如く、遠く海の音を聞く如く、人の聲とも火の聲とも物の音とも辨へられぬ騷々しきドヨみ闇に波うつて、おり〳〵豆炒る樣なる音も聞ふ。座敷には姉君病苦呻吟の聲凄し。

忽ち戶口の外ドロ〳〵足音して、『モウシ〳〵』、聲と

共に戸は破るゝ樣に鳴りぬ。吾は一身の毛、針の樣に立つて、息を凝らし、ヂット母上の顔打まもる。『モウシ〳〵』、戸は再び破るゝ樣に鳴りぬ。母上『誰方？』。『私で厶ります、ドゥぞ御開けなさつて……』。『私とは誰方？』。『私で厶ります、○○が家內……』。戸は開かれたり。一陣戸口より流れ込む寒氣と共に、さし向けたる行燈の光の中に、乳呑子を抱きし三十五六の女と、老爺と、老媼とあらはれたり。彼等は皆跣足なりき。『奧樣、熊本中は地雷火で燒打せられました、モウ何もかも仕舞で厶ります』、言ひつゝ女は潸然打泣きぬ。此は兼て親しく往來する材木屋某が家內の、變を逃れて眞夜中に來れるなり。女はさめて泣く懷の子を背たゝきつゝ、すべり上りて、泣く〳〵語りぬ。『市中は今大戰の最中で厶ります、今も安巳橋の爪に二人切り倒されて居るのを見て參りました』と。話の中より一道の鬼氣陰々立のぼり、霧の如く室に滿てり。吾は衆人の眞中に押入り、或は耳を外の方のドヨミに傾け、或は眼を戸口に注ぎ、鼠の音にも愕として其方を見かへりぬ。

限りなく長かりし夜はやう〳〵あけて、生白き曙色、雨戸の節穴より覗き込みぬ。戸あくれば、夜は灰色に明けたり。日も出でながら薄寒く、言ふ可からざる不穩の空氣はオド〳〵しく空を包み地をおほひぬ。昨夜の事は恐ろしき夢なりしか。夢の樣にもあり。否夢ならず、夢ならず。血腥き報知は、一つ聞へ、二つ聞へ、果ては夕立の如く一時に耳をうてり。『種田がやられた』。『エッ、其なら昨夜のあの聲はそれだつたか！』。『安岡がやられた』。『エッ』。『小關參事も』。『エッ』。『某々中佐も』。『エッ』。『鎭臺は皆やられた』。敵は誰ぞ。或者は云ふ、昨夜火光に驚きて家を飛び出さんとしたるに、烏帽子直垂に白刄提げたる人五六人前を通りしかば、膽を潰して逃げ込みたりと。或者は云ふ、昨夜

晩く他より歸りしに、某辻に到れば、道の眞中に倒れたる者あり、提灯さしつくれば、洋服着たる男の大袈裟に切られてまだ温かき血に浸り居るなり、ハツト驚きて駈け出さんとする向ふへ、白刄の光りキラリと閃めきて闇中より黒影ヌツと出で、吾もてる提灯のあかりに透し見て、コラ〱此方へは通ることはならぬとて追ひ歸へされたり。或者は云ふ、藤崎神社に勢揃する結髪横刀の群を見たりと。『やつたな！偖は神風連！』。

『神風連！神風連！』。『大戰爭、大戰爭！』。聲は熊本の一端より一端を簸れり。一夜火光に驚き、劍影に驚き、銃聲に驚き、叫聲に驚き、血に驚き、一夜戶を閉ぢて戰きたる熊本は、夜は明け戶開くると共に蜂巢の打散らされたる如く騷ぎ立ちぬ。訛傳は訛傳を生み、腥き風説は螢の如く飛び、霰の如く散れり。狼狽したる人影は彼方此方に走せ違ひ、恐慌の風は人の眼より口より顔より手より足より湧きて、市中の巷々街々を吹き廻りぬ。此時父上は薩境近き故鄕の祖父君を省して歸途季の姉君を將て城下より十里ばかり離れし小川驛に宿り玉ひしが、此夜姉君いたく胸騷ぎ心轟きて如何にも事ありげに思はれしかば、翌朝は早く立ちて城下より六里の松橋驛まで來玉へば、果然熊本騷擾の事聞へたり。尻ごみする車夫に三倍の賃を與へて、宇土驛のはづれ迄來玉ひしに、熊本より素足のまゝ逃げ來る者往還に引もきらず。父上は路にあひ玉ひし知人の逃れ來るに姉君を托し、獨り歸り玉ひぬ。神風連爆發、鎭臺、縣廳、實學連、難に遭ひしとの風聞に、緣家故舊皆父上の安否を氣遣ひて訪ひ來ぬ。翌日、粟の收納に出でし家僕は家より少しはなれし粟畑の中に隱しありしとて、竹筒、細梯子、火繩なんど持ち來りぬ。竹筒の中には焔硝を詰めありたり。

＊　＊　＊　＊　＊

時は風說を飾ひて、恐慌の中より事實を漉し出せり。事實は左の如くなりき。

廿四日の夜半霜を踏んで藤崎社頭を出でたる二百餘人の健兒は、一夜銀杏城下に荒れたり。夜明け幕落ちたる時は、司令長官は首なき骸となつて血に浸りし寢床に横はり、縣令は脇腹より流れ出づる臟腑を押へて芋畑に伏し、街にも、兵營の内外にも、縣廳のほとりにも、彼等が刀の下に斃れし死骸壘々たりき。

種田に向ひたる一隊は、難なく踏み込みて彼が首を打落せり。側に臥したる妾も刀下に死しぬ。彼女は十五の少女なりき。妾にはならじと拒みて聽かざりしを、貧しき父母は金の爲めに强ひて彼女を種田の許に連れ來り、十圓の金を受取り女を殘し置きて欣々として歸りしは其日の晝頃なりき。吾等が聞きし最後の悲鳴は、種田が東京より連れ下りし妓小勝が腕に手負ひて隣家に逃げ込みし聲なりき。彼女は東京なる父母に『ダンナハイケナイ、ワタシハテキヅ』の電報かけて、名高くなりぬ。種田が阿容寢首かゝれし醜態に引易へ、彼が書生は棒提げて敵を追つかけ、終に棒切り折られて死しぬ。

縣令安岡の宅に向ひたる一隊は、縣令參事大警部等が神風連鎭撫の事を談し居たる會議の席に斬り込たり。ソレと見るより、參事小關は立ちざまに、椅子を投げつけたるも、敵は一刀に拂ひのけて、勢猛く斬り込み來たり。大警部仁尾は、縣令に聲をかけ『刀は？』。『其の簞笥に！』。簞笥の引出明くる間一刀腕を切られながら、仁尾は安岡を後に庇ひて二刀三刀打合ひたるも、腕弱はりてはつたり倒れ、小關は切り倒され、安岡は膪を抉られぬ。敵は『モウ好い〳〵、少し活して苦しますが好いワ』と云ひすてゝ出で去れり。安岡は四つばひになりて裏口より芋畑に這ひ込み、創口より流れ出る腸を押へて此處に伏したるが、程なく病院に死

しぬ。翌日其あとを見れば、血は糸の如く裏口より芋畑に曳きて、青き芋の葉に赤き五指の痕、掌の痕斑々たりき。

太田黑の宅に向ひし一隊は失敗せり。彼は夫れと氣づくより早く窃かに燈吹き消して裏口より茶畑に逃れ、銀裝刀一本腰にして堤傳ひに二三丁離れし知人の宅に逃れぬ。神風黨は家に入り込み、暗中を摸りて、蒲團かぶりて臥したる夫人の顏に摸りあてしが、髯なきを知りて退き、終に家に火をかけぬ。一家取るものも取りあへずして逃れ、子供を置き忘れしを、妾某躍り入りて救ひ出せり。太田黑氏は其後直ちに吾家に逃れ來りて奧の一間に潜み、吾等は堅く名云ふことを禁ぜられて唯『叔父さん』とのみ呼びける。

其他の諸隊は、成功したるもあり、失敗したるもあり。

鎮臺に向ひたる本隊は、直ちに兵營に火をかけたり。驚きて寢衣のまゝに走せ出る兵士を、待ち設けたる彼等は『一つ、二つ、三つ……』かけ聲して片端より斬り倒しぬ。兵營の火を見て驚きて駈けつけたる將校役人を、彼等は闇中より躍り出で、一々斬り倒せり。洋服なる者は、斬りぬ。馬上の者は、斬りぬ。靴の音する者は、斬りぬ。狼狽せる者は、來ては斬られ、來ては斬られ、辻に斬られ、營前に斬られ、死骸は隨處に算を亂して倒れたり。此時火は五ヶ所に起り、火光空を焦し、夜は闇き所には叫聲起り、火明らかなる處には白刃閃き紅血迸り、提燈は流星の如く道に沿ふて飛んでは落ち、飛んでは落ち、馬蹄響いては忽ち倒れ、二百幾口の寶刀は渴虹の如く飽まで鮮血を吸へり。忽ち亂れたる兵營の中に非常喇叭二聲三聲響いて、眞黑き一列出で來り、彈丸は一齊に神風黨が白刃を閃かす眞中に飛び初めぬ。此れ氣早くも途中に洋服引ぬぎ料理番の印半纏着てかけつけし與倉、兒玉（今の陸軍

次官）中佐等が隊を揃へて防ぎしなり。訓練の効は見え來りぬ。神風黨の或者は傷きて其場に屠腹し、或者は丸に當りて死せり。彼等が運は落ち初めぬ。

東は白めり。夜は明けたり。彼等が爲す可き事は概ね終り、爲す可き時は全く過ぎぬ。彼等は散り〳〵に引揚げたり。斯くて城下の人士は一齊に騒ぎ立ち、文武官は血眼になつて流血横屍の間を奔走する時、彼等の或者は『我死なば弓矢の神と祝へ人、異國人を撫で切りにせん』と詠じて屠腹して死し、或者は自首して刑に服し、或者は野原に自殺し、或者は家に歸りて、沐浴更衣し、威儀を正し、心靜かに辭世を詠じて死せり。友と友と耦刺して死したる者あり。父子兄弟心靜かに水盃して、一間に自殺したる者もあり。歸り來れる少年を勞ふて、長閑に髮を結びやり、紋付の上下着せ、腹一文字に掻き切るを瞬きもせず見つめ、死骸片づけ終りて、音もなく自殺したる母もありき。而して彼等の七八人は、城下より西南七里を隔てし大嶽なる山上に逃れ、時々里に下り飴を買ふて生きたりしが、五六日過ぎて一隊の兵士村人を先に立てゝ攻め上りし時は、彼等は青松の下に並びて自殺し、頭は落ちて前にありき。中に十六ばかりの少年のみ腹に刀を突き立てたるまゝ死し居たり。此は他を介錯しはてゝ、最後に自殺したるなり。斯くて三人の巨魁、二百の黨類、大概皆死し、事直ちに平ぎぬ。彼等は藁炬火の如く一夜に燃へ盡し、悪夢の如く唯一夜に醒めぬ、彼等が流したる血未だ乾かず、彼等が燒きたる家猶燃へ盡さゞるに、彼等は已に亡かりき。

然も騒々しき空氣は久しく銀杏城下を蔽ひぬ。家に婢あり、三十四五、丈六尺に近く、滿面の痘痕菊石に似て、口廣く眼大なり。神風連の事ありしより、夜々出齒庖丁を枕によせて臥しぬ。曰く、萬一の時は、此庖丁にて庭の杉籬を切り、此處より旦那樣を御落し申す

なりと。種田の殺されし家は小川の彼方にあり。余は川に沿ふ道を通りて小學校に往復の度、川を隔てゝ其家を望み、彼夜の凄き聲思ひ出でゝ、常に身震するを禁じ得ざりき。

神風連は一夜に消えたり。『一つとやあ、人々驚く大砲の、音に燃へ立つ、五ヶ所の火……鎧直垂立烏帽子、其花やかさ！』流行唄は彼等を歌ひしも、彼等はやがて過去のものとなれり。熊本の一名物と稱へられし神風連も、此時に於て大率精華を殺し盡され、十年の戰爭に於て更に其餘殘を殺し盡され、果ては晨星の數よりも少なくなれり。彼等が遺族は多く悲しき運命に陷りぬ。二三年の後、身世の浮沈に耐へ兼ねて、幼なき四人の子を刺し殺し、二人の長次女を殘して自殺せる婦人あり。貧困汚辱に耐へかね、娘を殺して死せんとして、逃るゝ娘を『未練なッ』と叱りつゝ白刃提げて追ふて出で、警官の手におさへられたる者もありき。

十有九年瞬時に過ぎぬ。彼恐ろしき一夜に、殺せし者も、殺されし者も、今は久しく青塚の下に睡りて、世は開明になり、悧巧になり、從て輕薄になり、臆病になり、彼恐ろしく頑固なる恐ろしく眞摯なる恐ろしく熱心なる神風連なるものは、舊時代の昔語となりぬ。

* * * * * * * * *

『夜は寒くなりまさるなり、唐衣、うつに心の急がるゝかな』、刀を按じて歌ひし男今何處にかある。仰げば一輪の月高く天心にかゝりて、秋の夜いたくふけぬ。

比喩談

大臣の任命

相川漁夫

酷王として名を知られたる、地獄の君なる「死」、其國

の繁榮を圖るため、臣下の者を集め、如何なる者をか王の政を助くる、總理大臣に擇まんと問ひけるに、其候補者として「洪水」「地震」「饑饉」、戰爭などいへる惡靈、地の下より出で來り、是は地球上にて、人の最も畏るゝ者なりとて、「死」は歡んで迎へけるに、續いて「脚氣」「熱病」「赤痢」「虎列剌」などいへる病魔進み出でてこれまた其の功あるは、「死」の親しく知る所なれば、實にもと思ひて、其方にも心を配りけり。次に其匙を誤りて、人を斃す醫者」出で來りければ、「死」も亦その力あるを知り、首を傾けて稍思案に沈み居りけるが、暫くありて判斷を下し、數多の候補者の中より、諸惡の中の惡として、「不養生」を擇みて、總理大臣に擧げにける。

飲酒放蕩の害は諸惡の害に勝る

鶸と鳩

小さき鶸、終日歌を謡ひて、樂しみ居りしに、其友なる鳩は、愛の外何事をも心に懸けざりき。

「其樣なる事にて時を費すは甚だ宜しからず、女の最も大なる樂は、日々愛の友を得るにあり、如何なる歌か能く其の愛の友より受くる、接吻に勝る悦を與ふべき」と鳩は言ひけり。

「それとこれとは較べ難けれど、我身は只音樂の娯の大なるを知れり、是れさへあれば、他は望む要なし」と鶸は靜かに答へけり。

此問答の後、鳩は別を告げて、何處ともなく飛び行きけり。

時は去り行き、それより望と恐の打ち雜りたる、長き十歳の月日を經て、此友昔の森にて再び出で逢ひ、其形の餘りに變りたるに、心を取られ、互に久しく顔を見詰めて、立ち居りけり。

鶸は先づ禮儀正しく口を開き「我友、御機嫌如何、御身の愛の友は皆健かに御坐すや」と問ひけり。

鵠は力なき樣子して、「アー其事は言ひ給ふな、愛の友は皆失へり、若き時代も快樂も、はや過ぎ去りて迹もなし、他を愛して其意を迎ふるは、我が專一の考なりしが「是れ皆夢の迷にて、我は今も愛の心は失せざれど、我身は最早愛せられず」と答へけり。

鷄は其言の尾につきて「我身の不幸は御身程に非ず、我も年老ひ聲も枯れたれど、尚音樂の道を好み、昔にかはらず、心に溢るゝ喜あるなり」と語りけり。

形の美なるは一時の福なれど、能の優れたるは一代の寶なり。

藝は身を粧ふ無形の飾なり。

狐の公事

余は辯論の術を嫌ふ。此術を用ゐて、人は巧に言ひ拔け言ひ潛り、晝の如く明かなることを夜の如く暗くし、曲れるを以て直しとなし、眞を以て誤となすを常とす。

年老いたる狐、此術に長ぜりとて、自ら教師となりて學校を開き、其收入として肥えたる、鷄を得ること多かりき、其生徒に第一等の狀師とならんことを望む者ありて、其授業料は法庭に出て、始めての訴訟に勝たば、其時全額を納めんと約し、其師も之を諾ひ、互に文書に調印せり。

學業卒りて、弟子の狐は直ちに法庭に訴へ、其師の望む所に對し、雞を納むべき、理由なきを主張せり。法律に委しき豹、判事となりて、裁判を司り、雙方の辯論を聽きけるに、弟子先づ口を開き「我若し此公事に勝てば、無論拂ふに及ばず、是れ判官の判決にて、我等は其宣告に服すべきなり、又我負くるとも負ふ所なし、其は約定書の文面に勝たば、拂はんとのみありて、負けたる時の條件なし、我は我師に對して、惡意なし、只法律に隨ひ、斯く言ふのみ、宜しく判官の明斷を望む」と、いひければ、師の狐は之に對して「否々

其點に對しては法律は明かなり、此公事汝の敗訴とならば、負へる高を我に拂ふは、實に至當なり、又若し汝勝たば、文面の約束に隨ひて、直ちに我に納むべし」と抗論せり。

豹はしばらく無言にて坐し、思案に暮れ居る樣子に見えしが、遂に言を發して判决を下せり、「汝等の此の至難の訴訟にかゝはり、法廷は立ち入りて宣告す、師には今より學校をさしとめ、弟子には此後狀師となるを禁ず」と。

道理は貴重にして便利なるものなり。

蝮　と　蛭

あるとき蝮、蛭にいひけるは「我等に對して、人の待遇の異なるは何故ぞ、我と君とは同じく、人に喰ひつき、其血を流せど、人は君をば許して我をば避け、君を愛する者皆我を惡みて、我が死なんことを願ふとは」と。

蛭は答へていひけるは、「我友きけよ、我等の業は似たりといへども、我は癒すがためにし、君は殺すがためにす、我治療のため、數多の病人は死を免る、君は好んで人を害せど、我は好んで人の健康を計る、君と我と大に異なるは、此事なり、君は人を毒し我は人を醫す」と。

此物語より譬を引けば、蛭は眞の批評家にして、蝮は空しき讒謗家なり。

忠言と毒言とは生死の別あり。

エルシノアの白薔薇（續き）

（オフエリアの少時）　　空　花　生

オフエリア故園に歸りし後は、母のオードラその不在間の不注意を償はんとて、全身を獻げて小女の養育を親らし、快活なる氣風、健全なる事情の下に勉め

てその身を置き、過ぎにし森間生活のことは全く忘れたるもの、如くに日々を面白く過ごしければ、オフェリア忽ち過越方を夢の如くに打忘れ、悲なく憂なきエルシノアの一小女として、兄のリーアテスと共に罪なき日を暮しぬ。時には父のポローニアス侯をも談笑の友としつ。

父侯は資性善良親切にして多識よく世界の智識に富みぬ。彼は親しみ易くして馴れ難く、近くべくして犯すべからず、謙譲にして專横なる、多辯にして沈着なる性狀を混具したる人なりき。彼は又時としては空談者なりき、半ば眼を開きて兩手を擦り合ひ、微笑しながら語たれる樣は他に何の係類もなきが如く、悠々たるものありき、されどそは暫時にして、今は別に重要なる問題ありと云ひたげに、額を下げ椅子にもたれて右手に八字髯を弄りながら何事をか考へ始むる也。彼は好んで古代郡縣制度を論ずるを以て大得意となしき、彼が議論する時は、一言隻句悉く文章的の章句をなし、教ゆるが如く命ずるが如き態度をとりて、嚴格に且つ明瞭に言顯はす也。

數人の賓客の集りたるときは、必ず圓坐を作り、撃柝一聲會議も將に開かれんとするが如くに、その語る所は、會話と云ふよりも寧ろ演説なりき。彼將さに語り出でんとするや、必先づ咳嗽一個その先驅をなし、漸次に片手動き、兩手動き、一句一句の終りには必す兩掌を合せ、若くは片手の指を以て、明瞭に章句を分ちぬ。而して鋭敏なる彼れの眼光は、常に等閑過するものを驅り出さんとて絶え間なく、光輝くなり。客に對する斯の如き彼は妻に對するも亦斯の如く、子女に對するも亦斯の如くになしき。

斯の如き一種變調子の父の性狀にふれて、思はざる叱責を被り、オフェリア等兄妹の一方ならず當惑すると屢々なりき。

ある時彼は二人の小供を呼び、死せし友の紀念として殘されたる書畵を保存せんが爲めに、近頃新築せられたる庭園内の別墅を指さし、彼處には、吾が、ゆるしなくして、決して入るべからず、と嚴命しけるに之を聞きし兄妹の只ならぬ面もちを察し、咳はらひ一つして、父はたしかに御身等が、彼處に一度も亂入せざりしを知る、御身等のみならず、只一羽の鳥にても若くは少さき指一本にても、吾がゆるしなくして入ることなきを能く知れり、されば決して御身等が入りしと云ふにあらず、御身等は實に謹愼なる小供なれば。

されど父上よ吾等は彼處に入りたるなり。

何といふぞ？如何にして！近ふよりてよく吾が顏を見よ。少女は上をも下をも、側をも視ず、初めより、父の顏を眞直に守れるなり、されどこは彼が何事か詰問する時の口癖と知るべし。

父が語る所を聞け、身供は決して、彼の部屋に入り能はざる也、身供が父を欺かんとするも、父はその手にのらぬぞ、身供は鍵なくして如何にして、彼處にゆき得しか？

父上！御身は吾等が彼處に入りしを咎め給ふか、妾は是まで父上よりさることはきかざりき。

とオフエリア氣の毒さうに云ふを、リーアテス續きてさなり若し父上が早く言置き給ひしならば……

父はたしかに前以て言ひ措かざりき、されど父は彼の繪が全く壁に懸けらるゝ迄は身供の亂入を甚だ好まざる也、畵を汚されては、一大事なれば。否、否、不注意なる身供が何心なく亂入せんこともと思ひ、戶を固く鎖して、鍵は自から保ちて玆に在り。

然るか？父上よ、されど吾等は日々彼處にゆきて遊びたり。とリーアテス愈々父の意義に出づれば、然なり吾等は遊びたり、とオフエリアも之に加へぬ。

理の分らぬ小兒よ、そは決してあるべきことか、よ

く聞け、彼處の戸は、堅牢なる錠もて固く鎖しあれば戸を破らでは到底入り難きぞ、よしか、御身等父の許しなくて、何條入り得らるべきぞ。

されど父上よ！吾等は戸口よりは入らず、窓より入りたり！吾等は御身が嫁ひ給ふとは今日まで聞かざりし故庭の方に向ひたる小さき窓に這ひのぼり、裡に飛びこみて、新らしき美はしき畵を見るを樂しみとしぬ、吾等は少しも汚さず、只賞讃して遊びたるのみ。

* * * * *

花散り霜落ち、世は幾度か回轉して、オフエリアも今は花恥かしき處女の時代となりぬ。沈着にして平穩、而かも常に快活と喜悅に輝き、無量の愛情をこむる優しき眉目の一瞥には、如何なる凡夫もその劣情を聖化さるべし。その容姿もその心情も、純白浩潔、風に散らされず雨にうたれず、常に平和なる春風裡に育ちし白薔薇、一輪二輪、將さに幽香を放たんとす。

父ホロニアス倘ほも、その兒を完全に養育し、やがては國王兩陛下の寵にも入れんとの希望を以て、當時上下に交際家の聞え高きティラ孃の下に通はしめ、以て禮儀作法より、交際上の見習をなさしめぬ。

茲に於てオフエリアは第二のヲユサとも云ふべきテイラ孃を得て、朝夕その側に侍し、樂しく睦まじく日々を語り過こせしが、ティラは己が家に訪ひくる數多の賓客に彼女を紹介する前、略ぼそれ等の人物を知らしめんと勉めたりき。

されば尤も高貴なる御方々より始むべし。吾兩陛下、こは折々吾家に御駐車あらせらるゝにて、之より吾身の賓客となすは畏れ多きこととなり、多言せざるべし、されど、王の兄弟クラウデアス侯(後王を毒殺し位を簒ひたる人)は屢々吾家に來り給へり。且つは……御身は兩陛下に咫尺し給ひしとか、きかし給へ兩陛下の御人物を。

國王陛下は一見威嚴に溢れ給へり、武を尙び文に親み威高くして犯すべからざるは陛下の御特徵と見えぬ、御龍顏は勇敢なる兵士と一國の君主たるに適せり。女皇陛下は御容姿も御性質も共に美はしき御方なり、殊に御憐れみ深く、御情け優しき御方なれば、妾風情も容易く御前に侍べるを得べし。

然らば、王子ハムレットの君は如何なる御方なるや、妾は父が常々王子は實に學問好きの御方にて、大學にても優等の御譽れ高く、若し殿下にして、やんごとなき邊りの御方ならずば、天晴れ大學者として名を揚げ給はんなどいふを洩れきゝはべりぬ。

さなり、妾は寧ろ余り學問好きの御方なりと思ふなり。

――ティラよ御身の考へにては如何なる種類の御方と思ひたもふぞ

されば とよ、――妾は話し能はじ――否妾は、と幾度か躊躇せしが、間もなく、クラウデアス侯の如き人物とは正反對なり、オ、さなり、クラウデアスといへば、近きころ訪ひたまひて、御身に王子の性狀を語り申さるべし、この人は妾には好ましからぬ人なり、されどその身王族のことなれば、粗末になす譯にもゆかず、丈けばかりは高けれど、容姿には鵜の毛ほども威高き處なし。その外、さなり、ストルスバーグオスリクの君、クロンステンのエリクの君あり、この二人は何れも吾父の領地に隣りて住みたまへば、爾後御身は屢々面會し玉ふべし、この二人はその領地は孰れも近隣にあれど、その人物は著るく相違せり、ストルズバーグの若殿は極めて粉粧子なれど、他は他は……申分なき御方なり、この方は現時紳士の好標本と云ふもよろしかるべし。

とティラは云ひ繼けしが、何に耻ひてか、ほんのり紅葉を散し、しばしオフェリアの方を守りしが彼女は

怪める風情もなく只無邪氣に耳を澄しゐたりければ、左あらぬ躰にて、再び語をつぎぬ、されど凡の人かく言ふにはあらず、多くは前者の華奢なる姿に眩暈して、後者の質素なるを睨視するなり、妾と父の間にも既にその見解を異にせり、父はストルズバーグ侯をこよなく愛し玉へど妾は……

ティラよ御身はクロンスティン侯は富み玉はねど遙かに優りたる人物と思ひ玉ふとかと？オフエリア何心なく短刀直入しぬ。

倘ほ數行の會話ありて後、二人は象棋遊びに餘念なかりし時一人の侍女入りきたりぬ。ティラは手に象棋の駒をつまぐりながら、それと察し、今日は誰方にも面會いたすまじと申し置きたり、されど夕方ならば如何樣とも申されよ、と云へば、侍女答へて仰せの如く申上げたれど、聞きたまへず、側近く呼よせ給ひ、クロンスティンのエリクが參りたりと告げよとの事に侍れば。

エリクときゝてティラの顏は一面に紅葉しけるが、さあらぬ躰にて、その御方ならば、御案内申されよ、ロセンヒムより吾父の音信を何とかきかせ給ふべければ。

命を奉じて出てゆく侍女の後影を見送り、ティラは更にオフエリアの方に向ひ、妾はこの方を待ち居たるや、そは先程話せし方々のうちにて、誰れにても早く見たしと思ひ居給ふべければ、さにあらずや、オフエリアと名狀すべからざる喜悅を以て語れる樣は一見してそれと推察するに難からざれど、飽くまで無邪氣なるオフエリアは一向平氣にて、ティラの家にては何人も斯く温かに歡待せらるゝものと思ひぬ。

さてもエリク侯とは如何なる人ぞと戸口のあたり今かくと待ちをるうち一個の貴公子靜かに歩を運んで來るあり漸くに近づくに從ひ、不思議や彼女は小首傾

けて人知れぬ心をいためぬ。

それと知らぬテイラは滿腔の喜悅を以て彼女を新らしき珍客に紹介しぬ。エリクは何心なく一禮して面を上げ何事をか云はんとして、遽かに氣付きたるもの丶如く、これはとばかり驚きの色をそれとなく藏め、靜かにテイラの方に向ひ、何事をか耳語きたり。

されどその書面は何處に藏めあるならむ、聞き給ひし歟。さなり、父君の椅子の側なる黑木の箱にありとの事にて、この封箱にはそを開くべき錠も入れありとの事なればと言ひてエリクの渡す封箱を受取り、さらば御身の歸りたまはぬ前に尋ね申すべし‥‥されど忘れ給ふなと意味ありげなる一言を殘して出でゆくテイラを見返りし後、卓子に向ひ何處となく落付かぬ面もちして、その上に取り亂だされたる數個の棋子をとりて器械的につまぐりゐたり。

僅かなる機會はよく混亂したる記憶を治むることありオフエリアは彼の腕ボタンの象牙製なるを見出し、忽ちさてはと一叫し、武士！白き駒！妾は記憶す——森——テリク侯、さなり漸く思ひ出したりと獨語しつつエリクの顏を見つめて貴殿は彼方なりしよな？憐れなるジユサよ！貴殿はジユサを記臆し給ふにや、貴殿は其後は一度も訪ひ給はざりし、ジユサがいたく惱へたる事も、遂に果敢なくなりしとをも知り給はぬにや？　（未完）

家政

格言一掬

黃花

當月の米國家庭雜誌に斯樣な格言を載せてありました。

○聽くことをよくするは、語るをよくするに劣らぬ働

なり。

○父の相談相手になる娘は、嫁して概ね最良の妻となる。

○美しきのみなる美人は、一時男子の心を引くも、永く保つこと稀なり。

○他人の長を認むるを忌む所は、概ね吾短き所なり。

○己の善を輝かさんために、他人の悪を遠景にとる者あり。

○婦人は常に喞つ、戀人の情は良人に存せずと。然れど情婦の愛も亦細君に存せざるは事實にあらずや。

○了解しがたきは、心の糧となる可き重大のことを、輕薄なる言語に包むで出す婦人にぞある。

○燃へ起る友誼は速かに燃へ燼す。眞實永久の交は、時と共に成長す。

○巧みに談ずる才女を、我等は稱嘆す。然れど眞に吾等を感動せしむるは、沈默の秘訣を知る婦人なり。

○婦人の臆病は概ね小事のみ。大苦痛に耐へ、大困難を忍ぶ時には、男子の恐れ弱る所にも、婦人は斷乎として之れに向ふ。鼠をみて叫ぶ婦人も、外科醫の刀の下には却て齒をくひしばりて音を出さず。

男兒と女兒

家庭に於て小兒を敎育するに男兒と女兒とにより、又其性質によりて適宜に執行すべしとは吾人が屢々稱道する所なり、近刊の宇宙神敎に面白き翻譯文あり、

男は強剛性を有し女は自身を境遇に適應す、是れ男女生活上の根本的差違なり。

男は自ら槌を手にするに非ざれば釘打たんともせず、女は靴の後端、ブラシの背に至るまで何でも利用するには躊躇せず。

男は瓶の口を開くるには是非拔栓子なかるべから

ずと思へど女は剪刀を以ても栓を拔かんと試む、若し是にて出來ずんば却つて栓を瓶中に衝き入るるなり。

男の書記するに當りてはペン、インキ、紙等の諸道具一々備はりて室內靜寂を必要とす。

女は一の紙片あれば其何たるを問はず手帳の切にても書冊の餘紙にても書簡袋の背にても唯だ簡便にて用を辨ず、女は又剪刀を以て鉛筆を削り始終鉛筆若くはペンを取り換へ小供が傍にて讀書するもコックが來つて話かくるも平氣なり。

男は吹墨紙の適當ならざる時若くは手近にあらざる時は呟やくと雖も女は吹いて又は空氣中に振りて又はランプによて乾かす。

男は書狀を直に郵便函に投ずれど女は名宛を讀み回し封緘及び郵券の貼付を念入れて確め然る後強く函に投げ入るゝなり。

男の「左様なら」は別の時の最後の辭なり、女は是から新話に取り係る、何となれば女相互に要事を語るは別れんとする時にあればなり。

女は壞はれし物品を如何にか修復せんと思ひ煩へども男は他方に投げ措て之を打ち忘る。

男の書狀は記名を以て了り女の書狀は附白を以て始まる。

これ男女の性質を比較したるものなり、男女の中にも各々性質を異にする所あり、一概に論ずべからずと雖も、婦人は輕浮に陷り易き天性を有し、男子は急激に走るの天性を有す、躁急、輕佻、誇大、妄信、快活等は多く輕浮の氣性に屬し、豪放、磊落、任俠、暴怒、奇癖、激昂等は急激の氣性に屬す、輕浮の氣性中快活、急激の氣性中にて磊落、任俠等は患ふるに足らざれど、世の中には輕浮と急激の弱點に陷りしもの蓋し多數なり。

家庭教育を適當に施さんとならば能々此處に意を用ゆべき事なり、家庭教育の責任は母親の身にあり、男兒も女兒も親の膝下に在る間は大概母親の教育と感化を享くるものなれば、母親たるものは、其小兒の氣質の弱點に陷らざらるやうに常々注意あるが肝要なり。

男兒の性質多きに急激は又一個の勢力にして、此勢力により事業を奮起し事業を成功するものあれど、急激の弱點は思慮足らず、耐忍足らず、沈重足らざる所にあれば、父親又は母親たるもの丶責任は此弱點を矯正せん爲には、常々より、其小兒に思慮と耐忍と沈重の氣性を帶ばしむるやうにすべし、斯の如く急激の性質に思慮、耐忍、沈重を加へなば、希幾くは完全たるに至らんかかくするには、平生より其小兒に家庭的事務など取扱はせ、又其小兒一身に係る事は其小兒に自治自營せしめば、氣根永く次第〳〵に急激の性質を減殺すれども、若し我儘育ちに放任し置きなば、成人の後恐るべき人物となり、後悔臍を噬むも及ぶなきに至らん、華族などの息子などが奮發力なく、耐忍力なく、馬鹿殿、狂人息子の多きは我儘に育て置くが爲なり、能々意をつくべきことにこそあれ。

女兒に至りては尙更心をつけて教育せねばならぬぞかし、輕浮換言せば生意氣に趣くは婦人氣質中の弱點なり、母親は能く此弱點を矯正する心懸こそ專一なれ。

諺にも其娘の氣質を知らんとならば、先づ其母の氣質を見るに如かずとあり、これは實に能く出來たる言葉なり、吾人は世間を見るに母と娘との氣質が能く符合したるの多きに驚く、これ必竟母と娘とは日々其居を同ふし殆ど片時も母親の側を去ることなきが爲め、母親の氣風に感化したるものならんか。

記者の家に出入する一人の少女あり、彼女は年齡未だ十一二歲、常に語る所を聞けば、誇大と輕佻に滿され、自家と自慢と自身の手柄談のみ、我家には大醫の來臨

ある事、我家は西洋造と日本造の大家なる事、我家は電話を架設したる事、我家は婢僕車夫幾人ある事、我家は金庫幾個ある事、我家には簞笥幾本ある事、我家には某々出入し金圓若干貸し與へし事など其他は自身の學校及其他の塲所にて手柄を顯はせし話と衣服の高慢のみにて、傍にて聞くさへ片腹痛く、十歳を越へたる許の少女にて斯くも家内の事情を知悉するかと吾人は三たび舌を捲きたり、果然彼女の父は元は政治家として自由黨に關係あり、今は節を變して御用商人となれる高知出身の某、其母親は大坂の藝妓の果なりき。此少女は斯樣なる家庭の自慢話を平生母親の口より聞き、輕浮の性質次第に增進したるものならんか、小兒殊に女兒を適當に完全に敎育せんとならば、其母親たるもの、其身を生きたる模範的、標準的たらざるべからず。

球　葱

球葱の如何なるものかは西洋八百屋の前へ行かずとも大槪の人は能く知らるゝ所なり、球葱は我國在來の葱とは事かはり、其の球根を以て食用に供するものにして、西洋諸國にては蔬菜中需用の最も廣く且つ耕作に由りて、利益を享くること甚だ多く、而して球葱は其種類頗る多く、其の形狀には扁圓なるもの、正圓なるもの、及惰圓なるものあれど、中に就きて最も多きは扁圓にして吾人が能く目に觸るゝものはこれより、又其の色にも紅、黄、白等の諸種類あり、球根の大小も亦其の種に隨ひて同じからざれども、素人の家庭にて園藝の一として趣味と利益あるうへに廣き坪を要せぬものなれば、東京に住み中等以下の借家せる家庭にても、裏庭の隅などに、運動半分、而白半分つくり試みに玉へ。

一躰球葱に適する地味は、緻密にして肥沃なる深層を有する地に適するものにして、其の耕作の法は春季と秋季(目下最も播種に適す)兩度に播種耕作するなり、而して其耕作の法は兩季に隨ひて小異ありと雖も、專ら食用に供するを目的とし、且つ其の球根の肥大ならんことを希望するには、秋季の播種により、また種子を採るを目的とせば、春季の播種の法に由るを得策とするといふ。

春季の播種は四月上旬を以て播きつけの好時期とす、其方法を案内せば、先づ幅各四尺にして其長は適宜なる床を造りて、之に充分腐熟せる糞土(芥溜の土など妙なり)を攪ぜ和はして二三寸の高さに堆積し、其上を均平して後一反歩に對し、一升乃至一升二三合(裏庭にて作らば種子は五勺乃至一合にて充分)の比例を以て種子を取り、これにばら播となし、また其の苗の生育して一寸許に至るの期に及び、混水肥料を施すこと一回(肥料を施すことを厭はゞ、下肥掃除屋が來る時、其者に委賴するも宜しけれど、主人か主婦か其他の家人自らすれば樂み其中にあり、)これより十二三日間を經て、茲に苗と苗との間各五六分乃至一寸と隔つるを度となし、其内見込をつけたる良好の苗を存して、其の餘の苗を拔き去るべし。

六月上旬の候に及びては、其の根部の僅に球狀を呈するに際して、茲にこれを別に菜圃(始めの內は四坪五坪の裏庭に植え試み追々廣き坪に耕作すべし)に移し植ゆべし、さて其の移植に用ゆる菜圃は、豫め幅四尺の隴を行て搔き、これに苗と苗との間、縱横ともに三寸ばかりを隔てゝ植ゑつくべし、此事業も慣れざるうちは出入の百姓か掃除屋に就きて聞きたゞすか、始め一回は其道のものへ委賴し、其次よりは必らず自ら耕耘すべし、殊に病身の人は自づから鋤鍬を取り、又毎日手取をすべし、球根は成長肥大に趨くに從ひ、地外

へ暴露するものなれば、毎日能く手入をなし、土の被らざる球根見へなば、土を根の上へかぶせかけ成るべく保護すれば、根は格好よく成長肥大になるものなり。

八月中旬より九月上旬の頃に至り、球根の充分に成長し肥大とならば此時は收穫の期なり、また種子を採らんとするには、收穫の際、其の極めて善良なるものを擇び採りて、別に之を貯蓄し、翌年二月の候に至り再び菜圃に御し植えて花を開かしめ、種子の成熟するを待ち、これを採取するにあり、東京近傍の地にては此の物の花の候は恰も梅雨に際するを以て、往々其の花球は腐敗して種子を收むること能はざることあるなり。

秋季の播種に行ふにも亦前法によりて(九月十月候)其苗を育し、十二月上旬の候に及び、各々二尺を隔てて隴を立てこれに各五六寸を隔てゝ苗を移し植え、同月下旬の候に至りて混水肥料を施し、又翌年三月及四月を以て肥料を施すこと各々一回八月下旬より九月下旬に至り、球根の充分成長肥大し、其の莖と葉の凋萎するを待ち、好天氣の折を見てこれを收穫すべし、收穫したる後は、之を貯藏して以て冬と春との食用に備ふべし。

珠葱は寒地にも能く適するものなれば、これを栽培貯藏して冬季の食用に供せば、其益多かるべし、而して此の物は貯蓄中、動もすれば鬚根を生じ、又は莖芽を發することあるものなれば、其貯藏法に深く注意を要するなり、其良法は成熟の始に當り可及的晴天の日を擇びて採取し、直ちに日光へ曝乾して後、尚ほ乾燥の室内に於て架を設けて、互に重らざるやうに配置し而して充分に空氣を引きて能くさらすべし、或は糸を用ひ適宜に二三球を併せて、其の頭を結束し屋後の簷下などへ吊下し、置くも宜しき方法と知り玉へ。

さて球葱の食し法につきて一言せんか、此の物たる生のまゝにては葷辛の氣味甚だ強しと雖も、能く煮熟するときは、頗柔軟に且つ極めて甘味に富むものなり、其の調理法は種々あり、通例我國の家庭(西洋的)にては葱に代用し肉類と共に煮て食ふ、夫のオニオン、ソース(葱醬)の如きは葱を煮詰めて、これを半溶解物になるまで柔くし、之にバタ少量を加へて攪きまはし、食鹽と少量の胡椒とを加へ、猶甘味の強からんと欲せば之に味淋を加へて煮詰むれば則ちオニオン、ソースを得る、西洋人の食用法中に就きて其の一二を擧げんに先づ之をゆがき刻みて羹料とし、又は少時蒸過して後こまかに切り、酢をかけて食し、又は蒸したる肉に添えて食し、又はバタを用ゐいためて食する等西洋にては其調理法頗る多端なれども一々掲ぐるに遑あらず、兎に角家庭に於ける園藝の一として栽培せば樂み多きものなり。

手藝案内

造花術(梅、櫻、薔薇、牡丹)

◎梅。

●蘂は兎毛にて作り、其尖に糊に黃粉を混せしものを附つべし。

●瓣は寒冷紗か羽二重を用ゐるが宜し、其色はヂウラミンに、アヲタク少量を和したる液にて極々染むるをよしとす、紅梅は紅粉を用ゆるがよし、此花は多く瓣を要するものなれば、打貫を作りおき、打ち貫くをよろしとす、瓣鏝にて一々窪をつけ、單瓣、重瓣等適宜に造るべし。

●蒂と萼は一紙にて共につくり、其のさきをよくおすべし、此色はマセンダに黃粉を和したる色を便宜とす、また蒂の五片となりたるさきをマセンダにて染め置く、こは初め平かなる紙にて染め箸のさきを捲き萼を

つくり其さきを繰り置くを要す。
●蕊は染めたる寒冷紗にて綿を適當の形につゝみ、蒂と蕚をつける。
●枝は實物を用ゆるの便宜なり。
●纒方は蒂に瓣を糊にてつけ、次に蘂をつけ、花を枝へ小孔を穿ち、蒂のよりたるさきに糊をつけ、はさみ置くべし。

櫻◎

●蘂は梅の造花と同じく、たゞ注意すべきは兎毛を用ゐ、少し長きを使用すべし。
●蒂と蕚をも梅と同じく續きたるものを用ゆべし、初め標形にて切り斷ち、「エルロー」と「アヂタケ」とを混和したるものにて染め、箸の尖端にて、蒂と蕚との形を製し、さきをより糊にて固め、ざつと元結のやうにすることを忘るべからず、これは他にあらず、此花は蕚より一寸ばかりの軸にあるをもてなり。

●瓣は極々淡くフロクシンなどにて染めたる櫻の瓣の打貫にて貫き、尖端を少しく赤にてぼかし染とし、成るだけ實物に類似せしむること肝要なり。
●蕊は綿をつゝむこと梅と同斷なり、唯少しく長き形につくり。其尖端は少々ばかり鏝にて窪ます。
●葉は梅には不必要なれど櫻には必要なり、櫻の葉は通常は美濃紙を用ゐ、又絖に寒冷紗の裏打をなして用ゐるも宜し、これを打貫にかけ、「アヂタケ」に「エルロー」にて染め、其上をスカーレットにて淡くそめ、二ツに折りて内の方に窪ましめ、其上を筆にて蠟をぬり、火に炙りて全躰に浸みわたらしむるやうにすべし、雌葉は極々少さく製造して葉の本につけると知るべし。
枝は梅の如く實物を用ゐて妨なし。
●纒方は蒂に瓣を糊につけ次に蘂をつけ、葉四五枚を寄せ、其中より蕊、花とを四五本を出し、許を結び枝に取りつけ、其本に雌葉二三葉をつけ、上を木のはだ色

に染めたる紙にて捲き置くべし。

◎薔薇。

●葉は白又は黄のカタン糸（屡々カタン糸の事記したるがこれは洋服裁縫の時用ゆる糸にして舶來なり、また此糸日本に製せられず）を一寸ばかりに切りて、一本つゝ尖端に糊をつけて溶解したる蠟を着け、それを銅線の尖端に結びつける。

●瓣は絖又は寒冷紗又は天鵞絨にて造るも自由なるが、大低は寒冷紗に送らんとならば模形によりて裁り出し、なみの色に染むべし、暈染を出さんとならば、瓣をぬらし尖端を赤にて染め、花の心を少し黄色になすべし、重瓣ならば、内側のものはよく丸鏝を當てくぼますべし。

●蒂はキヤラコを葉色に染めて打貫にて打ち出すべし、蕚は厚紙にて製するも妨げなし。

苔は綿をつゝみ其上に蒂と蕚とをつける、●半開のものは小形の瓣に十二分に鏝をあて四五枚を重ねつゝみ蒂をつける。

●葉はキヤラコにても、絖にても、天鵞絨にて製するも好みに任す、而して薔薇の葉は一葉に五枚つゝ連りしものなれば、多く用ゆるには打貫を備え置くが便利なり、又薔薇の葉はその縁に細なるキザ〳〵ありて宛も鋸の歯の如ければ、これを切り出すには少しは手數を要すと知り玉へ。

●幹は蕚より出でし銅線を用ゐ、其上へ染紙を捲き、枝は竹を細く割りたるものを使用、其上を染紙にて捲くなり。

●纏方は蕚の銅線へ瓣をつけ、花は單重いろ〳〵あれど、大抵は小形瓣十枚ばかりをつけ、外側へは大形瓣五枚と蒂五枚と蕚とをつけ色紙を捲きて枝とすべし、薔薇は日本的花簪より束髪用其他いろ〳〵に需用多きものなり。

牡丹

●蘂は例の如くカタン糸を澤山寄せ、切りそろへて撫子花の蘂の如く糊にて山吹の心を碎き、黄粉にて染むるなり。

●瓣は普通は寒冷紗を用ふるを常とし、其形は模形によりて切り出し、白又は赤又は淡紅等實物の如くに色を染め、適宜に鏝を用ゐて瓣のくぼみをあらはすべし。」

●蒂は長短各々三本にて成立す、外側に在るものは長く、次に位せるものは圓くして少しく赤色を帶ぶれば、其心得にて都合六枚を瓣の下に置くべし。

●萼は丸鏝にて窪ましたる小形の瓣を抱きあはせ、これに蒂をつくれば可なり。

●葉は牡丹の葉の色に染めたるキャラコを葉の如くに切り出し、鏝にて葉條をつけ、銅線をつけて纒むるなり、凡て實物の通りにやるが肝要なるが、牡丹の葉は花の赤なれば葉の色黒味を帶び、花白色なれば、葉緣色なりと知り玉へ。

●纒方は先づ蘂より始め小瓣十枚ばかりをつけ、大瓣五葉を外側とし、蒂をつけゴム管を幹とし葉をつけて枝とすべし、牡丹には殊に新枝と舊枝あるに注意し、其色を異にすべし、これも實物により工夫ありたし。

以上これまで婦人の手藝たる造花術の一斑を說き盡せり、これにて此事情を終り、此業に志ある人は自づから工夫創作、天然にもまさる造花の術を得玉はゞ高尙の美術の一として世に需用多かるべし（完）

社交一斑

流行の栞

水雷艇　　春夢

これも近來發明流行の軍事的玩具の一にして、其形狀は魚形にして實物と毫も異ならず、其大きさは實物の十分の一即ち一尺一寸にして、銅

線の力により（始め火薬の力を假る工夫なりしも其筋の許可なかりければ、銅線の力に任せり）此水雷は爆發力及水中五間餘を進行する力を有し、また衝突すれば小物躰を破壊するの力を有すれども、決して危險なることなし、余其實況を目撃せしに、一方の水雷砲より一個の水雷を發射するや、水雷は水中を切り水中に潜り目的物（ブリキにて軍艦の形を偽したるもの）に達着すれば、理學上の作用により、水雷は頭端をもたげて艦の胴中に的中したり、余の見たるものは爆發せざる魚形なりしも、他の一個は衝突して水雷爆發する仕掛になり居るといふ、この玩具の發明者は元海軍省水雷營在勤高松龜次郎氏に係り、發明の目的は公私立學校の教育參考のため、且つ少年諸君に水雷の如何なるものかを紹介するにありといふ、芝神明三島町の志乃多商會にて賣捌く鐵葉製五十錢、眞鍮製三圓、斯の如き玩具は兎に角日本の少年に海事思想を盛ならしむるに庶幾か

冬帽子

未だ流行の域に至らずと雖も、余が今より觀測する所によれば、山高なれば黒九分の勢にして本年は山の高さ昨年より低く、頭角も丸味にして縁の廣きもの流行すべし。

中折の形は昨年と變らざれど、其色は濃茶、濃鼠、黒なるべし。

詳しき報道は追つてアトより報じ參らすべし。

流行の袷

「一葉散る咄一葉散る風の上」と鬼貫が叱り飛ばした時候に遷りにければイザやこれより流行の袷衣を案内申さん、去りながら昨今秋冷の候なれど未だ單衣の頃なれば確にこれぞとはつきりとは申し兼ぬれど余の推測にて本年袷の流行を豫言し置くは、一つは新に袷を製する人の便宜がなと思へばなり、

色の流行は本年も淡色か又たは極端に濃色なるべし、詳しく言へば白茶、肉色、淡鼠の類か、紺地かお納戸地の如きものにして、其縞柄は千筋、萬筋、微塵の如き成るべきこまかきものならん

さてこれより男女によりて如何なるものが流行するかを詳説すれば、先づ男物にて

袷には**つなぎ糸織**第一等なるべし、此品に向く色と縞柄は紺地か、鼠か、藍鼠の大名、千筋、萬筋、微塵なるべし

市樂は袷よりも小袖に適するものなれど、第二に亞くは此品なるべし、白茶、肉色、藍鼠、利久などの色に木賊、みぢん、萬筋流行すべし

第三に紹介すべきは結城紬なり、従來人望の多きは紺地の鼠か茶の大名、千筋、萬筋、微塵等なれど、淡色地に珍胡麻柄、小豆色の大名、千筋、白茶の微塵なんども面白し

流行の節糸に二種あり、一は米澤節糸織、一は八王子節糸織、いづれも淡色地に市樂の淡色と同じきもの本年も流行すべし

堅氣にして地味なるを好まば(商人的に)銘線の淡色に微塵縞宜しかるべし、此流行は啻に東京にのみ止まらず、京坂地方にも其勢力を及ぼせしも無理ならず、機固く染料もたしかにして、着て重からず、惡くひからず、着して男らしきは此品の徳か、實用的を好む人は此品に限る

秩父縞も近年珍柄を續々織出すに汲々たれば見るべきもの多し、平民的袷衣として男女に持はやさるゝは此品なり、本年も必らず流行するに疑なし平常衣物にて外出衣物にも旨くはまるは瓦斯双子なり、これは普通の絹双子とは事異り、唐糸百二十番四條をより合せたるものなれば特色も亦尠からず一見オヤ〳〵と思ふ面白いものがあり、之を織出して白木屋が有功二等賞を頂戴せしも當然なるべし、流行色及び柄はお納戸地、淡茶の午蒡縞、同珍三筋、紺地珍胡麻がら、同茶の胡麻がら、小豆地へ鼠の千筋、利久地へ片葉子持、紺地へ白と鼠の鰹三筋、紺地へ茶と小豆の亂立、紺地へ茶と鼠の千筋、萬筋、微塵等は流行の好位地に立つべしと思はる、價は二圓七八十錢昨年より調寶だと世上に請宜しければ本年も此格で行くべし

女物にては

又々繰り返すもチトうるさけれど、半四郎はイツも美顏にして强て醜顏だといふは眞の眼を備へざると等しく婦人の衣服社會にて先づと指を屈するは、お馴染の紋織お召なり、色は小豆色、紫紺、淡鼠、利久、柄は角とほし、割山椒、大小あられ、行儀あられ、さくさの類を可とす

紋織お召に亞くは縞お召なり、これは染小紋に見ゆるもの最も多く流行す、淡色地へ千筋、微塵くづし等の面白し

三ツ紋五ツ紋に染めて着んとならば、縮緬染形なり、鼠の薩摩筋、毛萬筋、角通し等屈指の品なり、去りながらこれは一種の社會に流行すると知り玉へ

市樂と米澤糸織とは重に男子が着るものなれど、近頃奇を好む婦人に見受けらる、併し着心はお召のしなやかなるに及ばず、柄は立縞ならば瓦斯二子同様、細き縞は市樂同様

八王子山糸織はこれまで屢々案内申し置きたる通り、此品ます〳〵珍奇の柄を織り出す、最も好奇の人の意に投す、

銘線縞及秩父縞は赤糸入の珍縞最も流行、地味なれば男物となる

以下男女を通して不斷着となるものは瓦斯結城、細双子、此二種に限れろやうの觀あり、其柄の珍奇にして而も丈夫向なるは愛知產に如くものあらじ

裏は男物なれば花色絹、中花若しくは淡花三分の勢にして、表地が銘仙、秩父縞なれば胴を絹にして裾廻しを羽二重金巾を用ゆべし

婦人は年増向にて鼠縮緬又は紺甲斐絹、あるは中花絹を用ゐ、令孃向には縮緬の櫻鼠、梅鼠、紅機、藤色、肉色、利久、小豆等の淡色の内より撰び玉へ

總して袷は相變らず二枚重が流行第一等

男物なれば上着と同樣の品を下着に用ゆる人多く、上着が市樂ならば下着を風通織に好む人も尠からず

婦人はお召を上着とせば、下着も矢張同品の柄の違ひしものを用ゆるやうなり、或は更紗縮緬の胴拔もよろしく、又は小紋の珍色も面白し

男女の帶

男物は本場筑前博多最も流行、此紋織は八王子よりも製出すれど其柄の珍奇にして機のかたき點に至りては筑前博多に越ゆるものなし、其流行は御納戸地、肉色、利久、白茶色の龜甲、鱗、菱崩し、さくさ縞、松川菱等次に流行するは片側右の紋織へ片側黑、お納戶、利久、紺鐵、紺、小豆、素鼠等の無地(第一)片側は紺、鐵、鼠の無地に片側同地の献上若しくは一本或は二本獨古、(第二)片側は黑、紺鐵、革鐵、藍鼠等に片側肉色、白茶、千歲の萬筋、萬筋、微塵、崩し、さぐさ等、(第三)全然紺、黑、藍鐵、革鐵の無地か、或は一方異りたる無地。

女物なれば(第一)繻珍織、(第二)糸織、(第三)厚板繻子、第一第二は一般凡ての社會に通し流行、第三は價格の廉ならさるゆゑに貴族向、其他は博多なれど新調するもの尠し夫の唐繻子又は小柳繻子は相變らず年増向。

腹合帶は上州產の小柳繻子の黑、小豆、御納戶、蝦色の丸龍摸樣の片側に繻珍の御納戶地、肉色、藤色、小豆色、櫻鼠等の草摸樣を合はしたるもの、令孃向年增向は度々案內せし如く黑の小柳又は都繻子に繻珍の小摸樣或は博多の微塵類を合はしたる相變らずといふ姿なり。

單羽織

目下フランチル、セル又は前記の袷の上に着用すべき單羽織は紋附なれば羽二重第一等、黑の三紋乃至五紋、紋は一寸より小なるもの、縞羽織なれば、市樂、より糸織、銘線の地味なる品、勿論此地質は二丈五

尺ものなれども巻着尺一端ものなれば仕立の時、婦人の前掛分即ち四尺餘ありと知るべし、丈長き方流行し、三尺七八寸着用する人には二尺五寸五分より六寸までが流行す

袷衣の價格

●市樂織	八圓より十圓
●仝上等	十二圓より十八圓
●繋糸織	七圓より十圓
●仝上等	十五圓前後
●諸糸織	十二圓より二十圓
●米澤糸織	六圓より八圓
●山糸織	四圓より六七圓
●節糸織	仝上
●銘線	三圓より五圓
●仝上等	六圓より八圓
●結城紬	六圓より八圓
●大島紬	八圓より十二圓
●米琉球紬	三圓より五圓
●秩父縞	四圓前後
●紋織御召	十三圓より十五圓
●縞御召	十圓前後
●上州御召	六七圓
●吉野織	七八圓
●瓦斯二子四糸織	二圓七十錢
●瓦斯結城	一圓半より二圓半
●細二子織	一圓より一圓半
●繻珍廣帶	七圓より十五圓
●仝上等	二十圓より四十圓
●糸錦廣帶	仝上
●厚板純子廣帶	五十圓より百圓
●唐朱子廣帶	八九圓より十二圓
●小柳繻子廣帶	仝上
●紋小柳片側	五六圓
●繻珍片側	五七圓
●博多片側	四圓前後
●仝男帶	二圓半より五圓
●仝上等	六圓より十圓

（日本橋區通一丁目白木屋報）

流行新柄織物

通信社より報し來る、讀者の參考の爲め次へ掲く

織物は生糸の昂騰せる爲めと總躰に品少なの爲め製造元の氣配頗る好況にして本春よりは白縮緬、白斜子、白羽二重を初め總て一割以上の騰貴なるが上物は頗る好人氣なり即今男物にて中等以上の賣口宜しきは結城紬、繋き織羽織は是迄黒斜子を用ひたるも近來黒羽二重、並に繋瀬等專ら流行し婦人は紋羽二重二枚むく流行す又近來專ら流行の縮緬模樣物は褄先模樣にして後ろ模樣は少しもなく極淡薄のものなり其模樣物の畫題は何れも高尚にして古歌より其意匠を凝らせしもの多し日本橋區照降町の伊勢清方にて或る高貴の方より近頃調製方を引受たる重ねむくの圖は「子の日、有明松、芦刈、鹽竈」抔の數種ありて何れも高尚優美の前模樣なり又袷地上等織物は伊勢清特製の新糸織は横糸に充分よりを掛けたる堅牢染にして結城紬に類似する新糸織（名稱未た附かず）一反價七圓五拾錢、縞柄は滯鼠サツマ筋、五本半等各種諸糸織目方二百目に付き中にもワザ所節織は羽織地として使用多し廣貫織もボツ／＼賣行く萬筋ありサビ鼠あり價は十七圓諸糸織最上等は又二十圓前後、縮緬カキ上染も本年の新柄小供袷又は下着地に適す一反八圓

にて藤色、菊唐草、藤鼠、吉野染等各種あり此外瓦斯糸織は益々進歩し最も新柄製造に着手中目下並もの双子一反七十錢前後瓦斯糸織壹圓十錢より壹圓三十五錢迄ありて上等絹物の割合に比し木綿物は安價なり

一種の流行

加賀金澤市近來の流行として載せて北國新聞へあり、轉載讀者の一興とす

本市の小林義成、友田應直兩氏等が今度發明者との間に一手販賣の特約をなしたる自動車の試運轉は豫期の如く一昨日午後大手町に於て行はれたり該車は當分の處單乘車、馭者付單乘車、四人乘車の三種を製造する都合の由にて一昨日の處にては前二種だけ出來し居たり即ち單乘車とは彼自轉車の如く乘車自ら足を以て車を進ますもの、馭者付單乘車は乘者は人力車にあるが如く別に馭者あつて車を動かすもの、四人乘車は正に箱馬車を見るが如きものなり、サテ昨日は先づ單乘車の試運轉を行ひたるが其速度の早さなか／＼に人力車などの比にあらず素人にても彼安全自轉車と殆んど速力を全うして走るを得べく初の程は思ひ／＼に大手町通りを往復し居けるが最後に發明者石原淸吉氏（山梨縣人）自ら乘車し全速力もて馳走したりしに實に二十六秒時八十餘間（一時間凡そ五里の割）の距離に達したり馭者付單乘車は山梨縣より輸送の途中に於て少しく破損を生じ修繕中に係りしを以て仝時に運轉を試むる能はざりしも夜に入り修繕を終りしを以て尾張町、十間町、堤町などに於て運轉を試みしが是れ亦見るものをして感嘆せしめたりき爰に圖するは即ち其馭者付單乘車也尤も多くの人は速力の早きは去ることながら足の疲勞亦た甚しからんと想像すべけれど發明者石原氏等の語る處に依れば決して去る憂へなく其疲勞なくして迅速に走るを得るの利便こそ機械の作用にして即ち其機械に專賣の特許を得たるなれとの事なり現に石原氏の如きは郷里にありて一日に三十里許りの距離を往復して左程に疲勞を覺えざりきといふ又た小林氏等が一手販賣の區域は加賀、能登、越中、越前、若狹の五ヶ國にして初めの計畫にては山梨縣に於て製造したるものを輸致する筈なりしが斯くては運賃等の爲め價格を高むるを以て更に當地に於て製造することとし石原氏の來澤せしも全く製造方傳習の爲めにして價格は他の分は未だ分らざるも單乘車は一輛二十圓許りとのことなり何がさて新發明だけありて自轉車などよりは一層妙なるは云はずもがな一二不完全と思はるる廉に改良を施さば至極便利の者とならんか、見物し居たりし病院のお醫者などは予等往診の時之れを用ゐなば簡便にして大に宜しからんと云ひ合へりき尚は小林氏等は車輛の販賣をなすの

外四人乘車を以て金澤津幡間、金澤松任間を定時往復し旅客の便利を計ろの企圖もありさなん又た當日試運轉終了後殿町殿待樓に於て披露の宴を催したるが婀娜たる紅裙の酒間を周旋するあり面白き可笑しき隱し藝なごもありたりさ云ふ

日用品諸物價　（九月廿一日）

◎白米小賣相場(十四日改正臨貫十五日ゟ實行)(一圓に付)　●一等白米七升四合●二等白米七升七合●三等白米八升●四等白米八升三合●五等白米八升八合

◎雜穀(一圓に付)　●本場大麥二斗八升●脇場大麥二斗八升五合●地廻裸麥二斗三升五合●粉橋小麥二斗一升五合●下總小麥二斗二升五合●常州小麥二斗二升五合●竹林麥上一斗五升五合●竹林麥並一斗七升●割麥上一斗六升●割麥並一斗八升●本石大豆一斗七升●支那白大豆二斗七合●同靑大豆一斗八升●元山大豆一斗六升●仁川大豆一斗六升五合●攝州麥安一斗九升五合●新吟小豆一斗六升●新川越白さ一斗四升五合●室蘭小豆一斗四升三合●越後小豆一斗五升七合●支那白小豆一斗五升二合●新本場金時一斗一升五合●新向地金時一斗四升●川越空豆一斗八升五合●播州空豆一斗八升●肥前空豆二斗一升五合●古河空豆一斗九升●同豌豆二斗●川越豌豆一斗八升●銚子隱元一斗五升●室蘭大玉隱元一斗五升五合●同隱元手無一斗八升●同鶉隱元一斗八升五合●同更紗隱元一斗九升●佐野搗粟一斗二升五合●備中空豆二斗五合●中玉隱元一斗五升五合●新白胡麻一斗一升●向地新黑胡麻一斗四升五合●常陸新黑胡麻一斗四升●川越同一斗二升●荏胡麻一斗三升五合●本場平豆一斗二升●庄內平豆一斗二升　向地目新黑白さ一斗五升●同新目無白さ一斗四升二合●売ソバ二斗七升●上稗四斗七升●新御社大豆一斗七升五合●新流山靑大豆一斗六升八合●新稻葉小豆一斗六升五合●新靑柳大豆一斗六升八合●相州小麥一斗八升●北海上黑豆一斗二升五合●地廻菜種一斗五升五合

◎鹽(相場一圓に付)　●赤穗鹽二俵七分●改良八家二俵七分五厘●改良大鹽二俵七分五厘●東濵純鹽二俵六分五厘●本齋三俵四分●改良新齋三俵八分五厘●古積上一俵九分●同並二俵

◎鰹節(一貫目に付)　●土佐節〆中小廿六圓ゟ廿四五圓大廿三圓ゟ廿二圓●同龜二十圓ゟ十七八圓●宇和節品なし●薩摩節大廿五六圓ゟ廿三四圓小二十圓ゟ十八圓●同鯖龜六七圓●伊豆節二十五六圓ゟ廿三四圓二十二三圓●同龜二十圓ゟ十八圓●遠州內浦込節二十二圓ゟ廿一圓次廿圓內外●同鮪二十二圓內外●城ノ腰二十四五圓ゟ廿二圓也●房總節上十八圓ゟ次十六七圓ゟ十五六圓●同龜廿圓內外ゟ十六七圓●常州岩城節込十七八圓ゟ十六圓十五圓●同龜十四五圓也●仙臺內部節十六五圓ゟ十四圓內外●同鮪小十六圓ゟ十四圓中大込十二三圓ゟ十一圓次九圓半●伊豆島節上十六七圓ゟ十五圓十四圓五十錢

雜錄

東京府下の女學校（四）

跡見女學校

◎位置　小石川區柳町(廿七番地)市の雜鬧を離れて、樹靑く、風淸き所

にあり。

◎校舍　清楚美麗にして頗ぶる宏壯なり、講堂寄宿舍等はよく整理して備はれるが如く、庭園等も閑雅なり。

◎主義及び目的　本邦固有の女德を養成し、日常必要なる學藝技術を教授するものとす。即ち純然たる國粹保存主義を以て、純然たる國粹女子を養成するものなり。其の教ゆる科目等は悉く我が國固有のものにして、英語科の如き一時は設けありしも、今や全く之を廢せし如き程なり。

◎歷史　明治八年神田區仲猿樂町に創設せられしが、去る廿一年更らに此所へ移したるものなり。盛衰として別に著るしきものは無かりしも一時歐化主義が其の勢を逞ふせしときは、稍々退色の姿なりしが、今や時勢の回趨とゝもに漸く盛んならんとするに至れり。二十年以後本校を卒業せしもの全科に於て十八名、專科に於て凡そ九十餘名、今の小松若宮の御息所、閑院宮の御息所の如きも、曾て此校に學ばれたる一人なり。現在の生徒は七月末の調査に依れば、寄宿生に九十三名、通學生に五十餘名あり。

◎風儀　其の主義前の如し、風儀は正肅なり。世人稱して華族女學校の分体なりとする位なれば、萬端のことに於て貴族的なるは言ふを俟たず。生徒の多數が華族、豪族の子女たるより、驕奢に陷ゐらざらんために、校長教師諸氏は非常に戒め居るといふ。

◎學課　本科、豫科の二學科ありて、何れも四學年とす。本科に入らんとするには高等小學卒業以上の學力あるを要し、豫科へは學力を問はず入學するを得。

學課は、國學、漢學、數學、習字、繪畫、裁縫、琴、點茶、挿花の九にして、生徒は望みに由り、其の一科若くば數科を修むることを得。

國學は其の最も意を用うる所にして、普通に行はるる文學、歷史、和歌は之を網羅せんとせり。今本科に於ける教授書目を擧ぐれば、

神皇正統記、水鏡、增鏡、大鏡、古事記、保建大記、徒然草、土佐日記、十六夜日記、紫式部日記、竹取物語、源氏物語(抄讀)、榮花物語、伊勢物語(抄讀)、古今集、萬葉集(抄讀)

等にして、其の他歷史、文法の口授あり。作文作歌等あり。

漢學も大學、十八史略、蒙求の類より、春秋左氏傳、中庸、史記(列傳)に至る凡そ十數種あり。

數學は普通實用の算術にして、高等數學としては四年級に幾何學あるのみ。

◎經費　束修金は壹圓五拾錢にして、寄宿生には食費三圓五拾錢塾費

五拾錢を納めしむ。授業料は一ヶ月國學、數學、漢學金壹圓（但し豫科二年までは五拾錢）、習字壹圓、繪畫五拾錢、裁縫五拾錢、琴七拾五錢點茶二拾五錢、挿花二拾五錢なり。故に全科を修めんとせば一ヶ月拾圓以上の經費を要すべし。然れども專科を修むるものは、授業料の高低に從つて經費にも多少あるべし。

◉校長及び講師　校長は跡見花蹊氏にして、講師には和學に落合、增田等の諸氏あり。漢學に武井氏あり。其他十餘名の教師を有すと云ふ。

女子學院

◉位置　麴町區上二番町三十三、四番地に在り。地、高燥にして閑靜に、而も市の中央に位ゐし、女學校としては頗る適當と謂ふを得べし。

◉校舍　宏壯にして甚だ華麗なり。講堂、教室、寄宿舍等の諸建築何れも善く整頓し、運動場の如きも廣濶にして淸麗なり。

◉主義及び目的　規則書に曰く、生徒教養の目的は、善良なる家族を成すに足るべき智德を具ふる女子を養成し、併せて普通學教員たる撿定を經て資格を得るの準備をなすに在り。故に基督教主義を以て敬神の念、愛國の情を涵養し、家事、經濟、兒童教育等の眞法を習熟せしむと。此の校の主義及び目的は實に是に外ならず。

◉歷史　明治九年の頃、番町に櫻井ちか子が立てたる櫻井女學校なるあり。同じ頃又た築地に外國宣教師等が設立せし新榮女學校なるありしが、或る關係を以て明治十四年の頃より共に矢島かじ子の下に管理せらるゝに至り。漸々進歩して一時は番町に四百人、築地に二百人の生徒を有せしが、終に明治廿三年を以て兩校女子學院の名の下に相合併し、今の地に設けらるゝに至れり。爾後七十餘名の卒業生を出だし、今は百三十餘名の在校生を有せり。

◉風儀　主義と目的以上の如ければ、風儀の如き固より正肅なり。一般女子の氣質として、過分に學問てふものを神拜するを防ぐは、校長始め有志者が苦心する所なりと云ふ。

◉學課　本校は幼稚園の科程より悉く備はれり。故に三年より幼稚園に入り、小學科、豫備科、普通科を經て高等科を卒業するは、凡て十九乃至二十歲の頃となるべし。

幼稚園は三年にして小學科は五年の修業期なるが、此は通常官設のものと異ならず。

學科を別て豫備科、本科、高等科とす。

豫備科は高等小學一年以上の實力あるものに入學を許し、修業年間は三年にして、學課は通常の高等小學と異ならず。

本科は四年の修業期間を有し、高等小學卒業以上のものを入て、普通中

等の程度に於ける教育を授く。

高等科は本科の上にありて、修業年間は二年なり。本科及び高等科にて重きを置くは英學、教育なるが如し。英學は豫備科一年より始めて、本科にて一般の力を得、高等科に入りて、翻譯、歴史、文學、心理學、天文學及び作文等を修む。教育學は本科三年に始まり、家庭、學校教育の學を授く。又高等科には隨意科として保姆教育科もありといふ。其の他高等科の學科には修身、和漢文、數學、理科、裁縫、音樂、體操あり。（無論本科には此の外に普通の學科備はれるものと知るべし）。特に和漢文の如きは頗ぶる注意せらるゝものゝ如し。外に本科に至り望みのものに彈琴を教うるなり。又專科としては音樂あり。

本校は從來生徒の意思獎勵のため英語專科なるものを設けざりしが、這般特に年長けて學を修むるものゝ便宜を計り或は之を設けんとの計畫もありと云ふ。

元來本校が修學期間の長きと、婦人教育者養成に傾けるとは、世の攻擊する所なれども、現今世に行はるゝ間に合せ主義は、校長始め諸有志者が取るを旨とせざる所なりといふ。

◉經費　入學束脩金は貳圓にして、授業料は壹圓五拾錢、寄宿費は三圓五拾錢（特別五圓五拾錢）なり。冬季は別に薪炭料として一時に壹圓を徴するものあり。槪して校儀淸儉を旨とすれば、平均一ヶ月六圓の資あらば、諸事不便なく送るを得べし。幼稚園及び尋常小學科の授業料は一ヶ月壹圓なり。

校長及講師　校長は矢島かじ子にして教師は本邦人十八人、外國人四人あり。

三種の帳簿

二合半士

予は二三年以前より、三種の面白き帳簿を所有せり、一種は彼の、小國民（雜誌）の記事に依りて作り、他は自分の創作に係りしものにして、この三種の帳、來客ある節は、常に座間に顕はれて、主客に興を催さしむ、而して其三の帳簿とは、一を書翰張交帳と名け、一を代々手跡錄とし、他を成山帖と呼ぶ、

書翰張交帳

この帳は、都て自身の知れる人の、書翰を張交ぜ置く物にして、其文體も、平らかなることにては、面白からず、朋友ならば、親密の間にも時に風波立ちて、絶交せん等いきまき、結極送り來りし書翰、或は海外

より、或は旅行先より、其國土の商業工業、農事風俗、又は勝景など、細かに報じ來りしものとか、一種云ふ能はざる、趣味の生ずるものを可とす、帳は粗末なる畫紙の四ツ切か、手製厚紙が適當ならむ、但し我國の書翰用紙は長きもの故、要所を切りて張るをよしとす、

代々手跡錄

この帳は、書翰張交帳と大同小異なり、前のは何人のも選まざれども、こは自家祖先より代々の書翰を集め、張りおくものにして、單に書翰に止まらず、譬へば祖先の遺言書、二世の自書せし帳簿、（二百年前位の金銀出入帳等尤も妙なり）、三代目の畫、四代目の詩文、五代目の書翰、六代の證文、七代の旅行日記など、種類の異るものを探し出して、張交ぜなば、趣味の深きこと、書翰張交帳に劣らず、

成山帖

三種の帳の中第一に目を樂しまするは成山帖なりとす、成山帖は書翰のみを主とせず、又代々の手書を列するものにも非ず手當り次第種々の紙片を張つける帳にして反古同樣のもの反て面白し、凡そ張交ぜべき材料は、如何なる家庭にも、山程あり、而して其品々は、古き新聞紙、郵便切手、知人名刺、内外國寫眞、書畫、大勝利號外、新聞附錄の畫、浮繪、引札、押繪、商店開業の廣告、賣藥の能書、書翰、手書、見世物番附、卷煙艸の外國婦人、外字新聞、内外人の肖像、この外勝手次第に張交ぜべし

要するに、以上の三帳は、作る時の勞少きに比して、趣味極て多しとす、寸陰を惜むの士と雖も、小暇を拾ふて以上の三帳を製し置れなば、來客に接して、こよなき談話の緒を引出す種ともなり、一段興を添ふに足らん、今や蚊隊日に退却し、燈火親しき頃にも間近し、夜長の一室に、團欒せる諸君、先づ試みに一本を作り玉へ、

紫式部 （口繪の畫解き）

「源氏物語」の作者として紫式部は、何人も之を知る所也。當日才媛の間に其品行の正しきを以て知らる。越前守藤原の爲時の女、母は攝津守爲信の女堅子といふ。一條帝の后上東門院に仕へ、後右衞門佐宣孝に嫁して大貳三位辨の局を生む。局は「狹衣」の作者也。近江石山寺には式部が「源氏物語」を稿したりといふ室あり。洛北紫野の雲林院白毫院の南に式部の墓あり。小野篁の墓の西に隣れり。